

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|---------|-------|------|----|
| 対人援助学特講 | 佐藤 直明 | 後期 | 2 |

ナンバリングコード

M_WEL513690

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

対人援助活動に従事する援助者自らが、自己の援助活動に関して活動内容を振り返り、活動初期判断状況や途中経過過程や具体的な成果や課題について、客観的に説明や報告や発表ができる。その中で、対人援助者としての自己覚知を図り、ソーシャルワーカーの役割を考察し、対人援助者としての資質の向上を図る。

概要

対人援助に関して、具体的な援助現場における、実際の活動を通して、広範な対人援助活動の概念や意義を整理立て、対人援助者としてのソーシャルワーカーの役割のあり方を分析・検討し、考察を深める。具体的な実践領域の調査も含め、事例研究や意見発表、ロールプレイ等を含め、求められる福祉支援の意味を探究する。

キーワード

ソーシャルワーク、エコロジカルパースペクティブ、エンパワーメント、スーパービジョン、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

対人援助活動に従事する援助者自らが、自己の援助活動に関して活動内容を振り返り、活動初期判断状況や途中経過過程や具体的な成果や課題について、客観的に説明や報告や発表ができる。その中で、対人援助者としての自己覚知を図り、ソーシャルワーカーの役割を考察し、対人援助者としての資質の向上を図る。

授業計画

- 第1回: 対人援助活動の領域と概念(講義)
- 第2回: 対人援助活動の意義と目的(講義)
- 第3回: 対人援助活動の価値と倫理の考察(講義・演習)
- 第4回: 対人援助活動の原理・原則と援助者の役割1(講義・演習)
- 第5回: 対人援助活動の原理・原則と援助者の役割2(講義・演習)
- 第6回: 対人援助活動とコミュニケーション1(演習)
- 第7回: 対人援助活動とコミュニケーション2(演習)
- 第8回: 対人援助のあり方考察と今後に向けての手がかりの整理(演習)
- 第9回: 対人援助活動における自己覚知のあり方(演習)
- 第10回: 対人援助における価値観と他者への理解(演習)
- 第11回: 援助的コミュニケーションの意味(講義・演習)
- 第12回: 援助における利用者への姿勢・態度のあり方(講義・演習)
- 第13回: 対人援助活動の実際: 事例研究 I (演習)
- 第14回: 対人援助活動の実際: 事例研究 II (演習)
- 第15回: 総括(講義・演習) 援助活動で求められる援助者の役割と機能考察

授業の予習・復習

授業の進行に応じて適宜指示を行なう

使用教材

- 1、「対人援助とコミュニケーション」主体的に学び、感性を磨く:諏訪茂樹(著):中央法規
- 1、「対人援助のためのコーチング」:諏訪茂樹(著)中央法規
- 1、ワークブック・社会福祉援助技術演習「対人援助の基礎」:山田容(著):ミネルヴァ書房
- 1、あなたを育てる「対人援助の本」:岡田誠(監修):KUMI出版
- 1、逐語で学ぶ「対人援助のための相談面接技術」:岩間伸之(著):中央法規
- 1、「対人援助実習サポートブック」:対人援助実践研究会(編):kumi出版
- 1、「ソーシャルワーク演習ワークブック」:相澤譲治他(編):ソーシャルワーク演習教材開発研究会(編):(株)みらい
- 1、「相談援助・保育相談支援」:笠師千恵・小橋明子(著):中山書店
- 1、「支援者が成長するための50の原則」あなたの心と力を築く物語:川村隆彦(著):中央法規
- 1、「人間関係とコミュニケーション」体験学習型ワークブック:手話秀樹(編集):建帛社
- 1、「価値と倫理を根底に置いたソーシャルワーク演習」:川村隆彦(著):中央法規

評価方法

評価方法

- ①出席 70%以上
- ②レポートを提出し合格すること
- ③レポート不可の場合の対応なし

基準

- ①レポート課題の提出。対人援助者の援助姿勢と原則の確認、援助活動の現状と課題を踏まえた援助者の役割と機能の考察に関する理解、習熟度について審査する。
- ②レポート評価は100点満点で評価し、60点以上であること。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

特になし

前年度の授業評価

対人援助は、その活動そのものが、日々の様々な援助活動実践場面で行われている。授業は視聴覚教材等も使用しながら、演習形式で行われる事が多い。

その分、授業では、フィールドワークや事例研究を行いことが多い。相互交流等を通して、自己覚知を図り、広くて深い分析・検討を行う。そのため受講生が一定数多く居ないと、相互の意見交換交流が図られず、単なる感想の論述だけになってしまう事があった。

今後、出来るだけ実践に即した、問題解決に向けての取り組みに手がかりとなるような展開が図れる、考察を加えて行きたい。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|---------|-------|------|----|
| 健康福祉学特講 | 松元 泰英 | 後期 | 2 |

ナンバリングコード

M_WEL513690

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

近年の子どもの障害の傾向や特性について学んでいく。

概要

周産期医療の現状と近年の子どもの障害の傾向を理解していく。また、子どもの障害の特性やそれに対する治療法及び療育や教育の在り方について学んでいく。

キーワード

周産期医療 脳性麻痺 発達障害 筋疾患 神経疾患 自閉症スペクトラム てんかん

授業の到達目標

- 1 周産期医療と障害児の関係について理解する
- 2 脳性麻痺、発達障害 筋疾患、神経疾患などの障害について理解する
- 3 各障害に対する治療法を知る
- 4 各障害に対する療育や教育の現状を理解する

授業計画

- 第 1回 オリエンテーション
- 第 2回 周産期医療の現状について
- 第 3回 脳性麻痺の種類やその特徴について
- 第 4回 脳性麻痺の治療法について
- 第 5回 脳性麻痺の療育や教育について
- 第 6回 筋ジストロフィーについて
- 第 7回 脊髄性筋萎縮症について
- 第 8回 自閉症スペクトラムについて
- 第 9回 自閉症スペクトラムの療育や教育について
- 第10回 発達障害について
- 第10回 発達障害の療育や教育について
- 第11回 てんかんについて
- 第12回 てんかんの治療法について
- 第13回 重症心身障害児について
- 第14回 重症心身障害児の療育や教育について
- 第15回 障害児関連の論文研究

授業の予習・復習

周産期医療、脳性麻痺、自閉症スペクトラム、発達障害に関わる記事等をインターネットなどを通して学習して

おくこと。

使用教材

DVD パソコン等

評価方法

最終回でのまとめのテスト(30%)、レポート(50%)、平常点(20%)

履修上の留意事項・授業時間外の対応

遅刻・欠席は平常点に加味する。

授業での討議内容や態度を評価点に加える。

何か質問などがある場合には、メール(y-matsumoto@soc.iuk.ac.jp)にて、時間調節を行うこと。

前年度の授業評価

前年度の授業内容とかなり授業内容を変更した

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|----------|-------|------|----|
| 高齢者福祉学特講 | 中山 慎吾 | 後期 | 2 |

ナンバリングコード

M_WEL513692

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

高齢者支援の諸領域、支援方法、高齢者の就労支援、社会参加等について学習する

概要

高齢者支援に関して、高齢者支援の諸領域とソーシャルワーカー役割、高齢者の諸側面とアセスメント・検討方法、認知症の人と家族への支援方法等を学習し、実践に活用できるようにする。また、高齢者の就労など、生きがいや社会参加について支援が行えるようにする。原則として授業途中のレポートに関してはその後の授業またはEメールにてフィードバックを行う。

キーワード

高齢者支援、介護者支援、社会参加、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

高齢者支援の諸領域とソーシャルワーカー役割、高齢者の諸側面とアセスメント方法、認知症の人と家族への支援方法に関して説明できる。高齢者の経済状況や就労支援、生き甲斐や社会参加についての支援方法が行える。

授業計画

- 第1回: 高齢者支援の諸領域と支援者役割、およびその成り立ち1(講義)
- 第2回: 高齢者支援の諸領域と支援者の役割、およびその成り立ち2(講義)
- 第3回: 高齢者の諸側面とアセスメント1(講義・演習)
- 第4回: 高齢者の諸側面とアセスメント2(講義・演習)
- 第5回: 認知症の人と家族への支援方法1(講義・演習)
- 第6回: 認知症の人と家族への支援方法2(講義・演習)
- 第7回: 高齢者支援の現状と課題1(講義・演習)
- 第8回: 高齢者支援の現状と課題2(講義・演習)
高齢社会対策基本法と高齢者の社会参加(講義)
- 第9回: 高齢者の経済状況と所得保障(講義)
- 第10回: 高齢者の就労(講義)
- 第11回: 高齢者の生きがい・社会参加(講義)
- 第12回: 高齢者への就労支援の実践と課題(講義・演習)
- 第13回: 高齢者への心理的健康のための支援(講義・演習)
- 第14回: 高齢者の社会参加とボランティア活動(講義・演習)
- 第15回: コミュニティと高齢者の社会参加(講義・演習)

授業の予習・復習

授業の前後に必ず合計4時間程度の予習・復習を行うこと(授業前: 次回のテーマに関する資料収集・読解等、

授業後:授業での配布資料等の読解・考察等)。

使用教材

参考文献: 中山慎吾(2011)『認知症高齢者と介護者支援』法律文化社

評価方法

成績評価方法

- ①7割以上出席した者を成績評価の対象とする(できるだけ毎回出席してください)
- ②レポートを提出し合格すること ③レポート不可の場合の対応なし

成績評価基準

- ①レポート課題の提出 100%。高齢者支援の諸領域とソーシャルワーカー役割、高齢者の諸側面とアセスメント、認知症の人と家族への支援方法、低所得高齢者の就労支援、生き甲斐・社会参加への支援に関する理解、習熟度について審査する。
- ②レポート評価は100点満点で評価し、60点以上であること。
- ③授業への参加状況も加味することがある。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ・授業計画等に変更する場合がある。
- ・オフィスアワー等については授業開始時などに指示する。Eメールアドレス: nakayama@soc.iuk.ac.jp
- ・学期途中で提出を指示したレポートについては、授業またはその前後でできる限りフィードバックを行う。

前年度の授業評価

学生間の議論を多くするようにし、関心に合わせて授業内容を追加するなどを行いました。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|----------|-------|------|----|
| 障害者福祉学特講 | 肥後 祥治 | 前期 | 2 |

ナンバリングコード

M_WEL513692

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

障害者支援の学としての福祉学を考える時、その制度や支援方法論はしばしば議論されてきたが、その内容や方向性を吟味していく上で障害学の視点は欠かせない。本講では、イギリス障害学の研究成果の概説書を用いて障害学への理解と議論を進める。

概要

本稿においては、Barnes, Mercer と Shakespeareによる”Exploring Disability” の日本語訳である「ディスアビリティ・スタディー」をテキストに用いて、障害学における基礎の理解から実際現状の分析について学習を進める。内容的には、障害学における用語の理解、社会学からの障害状況へのアプローチ、慢性疾患と障害への理解と処遇、障害学にもちいられる基礎理論や分析手法、障害者政策と障害学といった内容について扱っていくことになる。また、日常的な障害者問題に対して障害学がどのように適用可能かについても考察を深める。

キーワード

障害学、障害者観、社会学、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

本稿では以下の到達目標を設定している。

- ・障害学の概要について他者に例をつかって説明することができる。
- ・障害学の研究方法や分析について説明することができる。
- ・障害学が障害者処遇政策において及ぼしうる可能性について議論ができる。
- ・身の回りの障害者問題を障害学の視点から見直すことができる。

授業計画

1. オリエンテーション。
2. 障害学とは。
3. 障害理解の2つのモデル。
4. 障害学の視点の特徴と現代の障害理解への関係性(討議)。
5. 慢性疾患と障害への理解と処遇の関係性。
6. 障害学の社会理論の発展と分析方法。
7. 障害学の研究方法に関する整理(討議)。
8. 社会参加を阻む障壁。
9. ケーススタディー1(教育、雇用、生活環境)。
10. 社会政策と障害者。
11. 障害者運動と政治。
12. ケーススタディー2(障害者運動)。
13. 障害者と文化。
14. 障害者社会学の可能性。
15. 講義の総括討議

授業の予習・復習

使用するテキストに関する割り当て部分の口頭発表とそれに必要となる資料の作成をおこなう。また、ケーススタディで使用するために必要な障害者問題に関する記事のスクラップブックの作成。

使用教材

本講は、以下のテキストを中心に据えて進めていきます。

バーンズ C.、マーサー J.、シェイクスピア T. 著。杉野昭博・松波めぐみ・山下幸子訳。「ディスアビリティ・スタディーズ、イギリス障害学概論」。2004, 明石書店。

評価方法

本講に遂行に際して作成された口頭発表に用いたレジュメ(40%)、討議における参加の積極性(20%)、作成したスクラップの提出(15%)、および最後に提出される総括レポート(25%)をもとに評価を行います。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

指定テキストにおけるそれぞれの授業において扱う部分は、オリエンテーション時や各授業の前に指定するので、必ず目を通してくること、また担当になった部分においては、簡単でも良いので口頭発表用のレジュメを用意してください。

遅刻、欠席、中途退出への対応は、大学の基準に準拠します。

質問等に対しては、授業中、授業終了後に対応することを念頭においていますが、必要である場合や確認事項等ある場合は、以下のe-mail アドレスにメールをお願いします。

higosho@edu.kagoshima-u.ac.jp

前年度の授業評価

なし

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|---------|-------|------|----|
| 児童福祉学特講 | 岩井 浩英 | 前期 | 2 |

ナンバリングコード

M_WEL513694

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

子ども家庭の福祉とソーシャルワーク実践について

概要

本科目では、まず、子ども家庭福祉の基本について再確認する。次に、領域各論として、実施体制や施策・サービス内容等についての理解を深める。そのうえで、問題特論として、ウェルビーイング追求の視点から、子ども家庭支援のソーシャルワーク実践について実践的に検討・考察することを目的とする。

※なお、問題特論では、毎年度、時宜に適った特色ある問題を設定する予定である(今年度は、スクールソーシャルワーク等)。

キーワード

子ども家庭福祉の基本、領域別の実施体制や施策・サービス内容等、子ども家庭支援のソーシャルワーク実践、アクティブラーニング

授業の到達目標

1. 子ども家庭福祉の基本について再確認する。
2. 領域各論として、実施体制や施策・サービス内容等についての理解を深める。
3. 子ども家庭支援のソーシャルワーク実践について実践的に検討・考察する。

授業計画

第1回 序／基礎論

- オリエンテーション
- 子ども家庭福祉の基本(家庭等生活状況)

第2回 基礎論

- 子ども家庭福祉の基本(理念・対象・実施)

第3回 領域各論

- 保育・子育て(家庭)支援領域(保育所保育)

第4回 領域各論

- 保育・子育て(家庭)支援領域((他)保育サービス)

第5回 領域各論

- 保育・子育て(家庭)支援領域(子育て(家庭)支援政策)

第6回 領域各論

- 保育・子育て(家庭)支援領域(子育て社会ビジョン)

第7回 領域各論

- 養護・自立支援領域(要保護等問題)

第8回 領域各論

- 養護・自立支援領域(社会的養護)

第9回 領域各論

○障がい児(者)支援領域(障がい理解)

第10回 領域各論

○障がい児(者)支援領域(障がい保健福祉施策)

第11回 問題特論

○子ども家庭支援のソーシャルワーク(基礎)

第12回 問題特論

○子ども家庭支援のソーシャルワーク(実践a)

第13回 問題特論

○子ども家庭支援のソーシャルワーク(実践b)

第14回 問題特論

○子ども家庭支援のソーシャルワーク(実践c)

第15回 総括・補足

○ソーシャルワーク専門職のあり方等

○まとめ

授業の予習・復習

○各自、授業前後に合計4時間程度の予習・復習を必ず行うこと。

○具体的な学修内容は、毎回授業時にそのつど指示する。

使用教材

参考書:

◎九州社会福祉研究会(編)『21世紀の現代社会福祉用語辞典』学文社

※その他、必要に応じて、そのつど参考書を紹介する。

特記:

○教科書は使用せず、必要に応じてプリント資料を配布する。

○「福祉小六法」(最新年度版)について、毎時間持参することが望ましい。

評価方法

期末レポート 60%

(随時)レポート等 20%

受講状況 20%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

○必要に応じて演習形式をとる。

○随時課すレポート等課題に対するフィードバックは授業中に行う。

○上記「評価方法」における「受講状況」とは、受講の意欲・態度や取り組み等を踏まえるものである。

○授業時間外の対応については、初回授業時に指示する。

※メールアドレス:iwai@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

○今年度より、新規担当。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|-------|------|------|----|
| 保育学特講 | 前原 寛 | 前期 | 2 |

ナンバリングコード

M_WEL513761

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

現代社会における保育の探究

概要

保育は、こどもと保育者がともに生活する営みであり、そのために求められる専門性がある。また、その場は、内部に閉じてしまうものではなく、社会の中に位置づけられなければならない。本授業においては、保育者の専門性及び保育と社会との関係について学ぶことを目的とする。その柱は、日常性、発達理解、子育て支援、同僚性であり、それらを順次取り上げていく。授業の進め方としては、文献読解及び情報探索に基づく課題発表及びディスカッションを通して理解を深めていく。また、適宜レポートの作成を行い、その点検等を通して論理的思考力を高めていく。

キーワード

保育、保育者、こども、専門性、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

保育における保育者の専門性について理解できる。

現代社会における保育の位置づけと役割について理解し、課題解決を探究することができる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション及び保育概念について
- 第2回 園生活を考える
- 第3回 日常性について
- 第4回 こどもの居場所
- 第5回 存在感について
- 第6回 発達を捉える視点
- 第7回 育ちのステージ
- 第8回 保育実践の臨床性
- 第9回 保育カンファレンス
- 第10回 保護者支援の必要性
- 第11回 子育て支援の展開
- 第12回 保育者相互の支援
- 第13回 保育者の専門性
- 第14回 保育者の倫理綱領
- 第15回 本科目で学んできたことの振り返り

授業の中でテーマにそったプレゼンテーションを院生が行う。それに基づくディスカッションを行うとともに、より効果的なプレゼンテーションのための指導を行う。またレポートの提出に対しては内容の検討及び添削を行う。

授業の予習・復習

授業に際しては、文献を精読し十分に理解を深めてから臨むこと。また必要な情報の探索も自身で行うこと。授業前後に必ず合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

テキスト『こどもの傍らに在ることの意味』大場幸夫、2007年
このテキストを中心に授業を進める。なお、参考文献等は授業中に適宜紹介する。

評価方法

平常点(10%)、ディスカッション内容(20%)、課題発表(30%)、レポート(40%)などによって評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

履修の前提として、保育制度や保育問題について基礎的な事前学習をしておくこと。
質問・意見等については、授業の前後に対応する。時間外の場合はメールで対応する。
メールアドレス zengen@mua.biglobe.ne.jp

前年度の授業評価

受講生が1人であったため、受講生に合わせた展開ができ、十分効果的に授業を実施できた。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|--------|-------|------|----|
| 精神医学特講 | 野田 隆峰 | 後期 | 2 |

ナンバリングコード

M_WEL514937

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

精神保健福祉分野の福祉臨床研究の一助として、精神科福祉臨床を精神病理学の視点から学ぶ。

概要

精神医学は、理論的根拠を身体面におく「生物学的精神医学」と心理社会面におく「心理的精神医学(精神病理学)」の2大潮流がある。

精神病理学はフロイトの精神分析論を母体にして発展してきたが、その理論の臨床的問題などへのアンチテーゼとして今日では多様な学派が存在する。その一つである現存在分析学派の人間学的精神医学は、人間存在の本質を問う哲学的人間学と精神分析的(力動的)理論を融合したもので、こころの病いをもつ精神障害者の理解には極めて重要な精神医学(精神病理学)の一分野になっている。

ここでは精神病理学の一分野である人間学的精神医学の観点から精神保健福祉臨床に関して平易に解説する。

キーワード

精神病理学、人間学的精神医学、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

精神保健福祉臨床を精神病理学の視点からも理解出来るようにする。

授業計画

第1回 講義の概要

第2回 精神医学の概念

第3回 生物的精神医学研究と精神病理学研究の歴史と現状

第4回 精神病理学の解説

第5回 アクティブ・ラーニング

第6回 脳の解剖・生理、精神疾患(障害)の成因・分類(ICD-10、DSM-IV-TR)

第7回 精神科臨床の概説

第8回 治療支援法(主に精神療法の理論と実際)

第9回 アクティブ・ラーニング

第10回 主要な精神疾患(精神病圏、神経症圏)の精神病理と治療(精神療法)

第11回 主要な精神疾患(児童青年期精神障害圏)の精神病理と治療(精神療法)

第12回 主要な精神疾患(脳器質性障害・症状性障害圏、精神作用物質使用圏)の精神病理と治療(精神療法)

第13回 精神医療と精神科福祉臨床

第14回 昨今の精神保健福祉現場の現状

第15回 まとめ(アクティブ・ラーニング)

授業の予習・復習

講義の前後に少なくとも30時間ほどの予習復習を行うこと。
特に、予習では精神医学の基礎知識を中心に学習すること。

使用教材

テキスト・参考文献等は講義中に随時紹介する。

評価方法

決まったテーマに関する論述50点(50%)、レポート50点(50%)の合計100点で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業は討論形式で進める。

質問等は講義中においても随時受ける。

精神医学の基本的知識は出来るだけ予習をして講義に臨んでいただきたい。

連絡先:(メルアド)nodaryu@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

受講学生の精神医学の基礎知識不足は否めず効果的な授業展開ができたとは言い難い。しかし、自由闊達なディスカッションが頻回になされたことは一応興味をもって受講して頂けたと思っている。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|-----------|-------|------|----|
| 精神保健福祉学特講 | 岡田 洋一 | 後期 | 2 |

ナンバリングコード

M_WEL513692

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

精神保健福祉の歴史と精神障害者へのソーシャルワーク

概要

日本においては第2次世界大戦以前は精神障害者という発想はなく精神病者という見方で治療の対象としかになっていなかった。戦後、1950年に精神衛生法が生まれて初めて精神病者は「精神障害者」として医療と福祉の対象になった。しかし、実際は民間の精神科病院の中で隔離と収容を中心としたものであった。その後、宇都宮病院事件や大和川事件などが起こり日本の精神科医療は国際的にも批判された。その結果として精神保健法が成立しさらに精神障害者の地域移行をめざし精神保健福祉法、精神保健福祉士法が制定された。そして日本の精神障害者は精神保健福祉法と障害者自立支援法(障害者総合支援法)によって、治療と福祉が提供されるようになった。この歴史的経過を理解することによって現在の精神障害者の置かれている状況を学んでいく。さらにノーマライゼーションの実現とリカバリーを可能にしていくソーシャルワークについて理解を深めていく。

課題に対するフィードバック:講義についての感想や質問、課題レポートに対して質疑応答を行う。

キーワード

精神科ソーシャルワーク、精神障害者福祉の敵視、社会的復権、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

①精神保健福祉の歴史と現状を理解する。②精神障害者へのソーシャルワークについて理解する。

授業計画

- 第1回 精神保健福祉学とソーシャルワークについての総論
- 第2回 1900年精神病者監護法から1950年精神衛生法まで
- 第3回 1950年精神衛生法から宇都宮病院事件を経て1987年精神保健法まで
- 第4回 精神保健福祉法と障害者総合支援法
- 第5回 ノーマライゼーションの思想と精神障害者
- 第6回 ベテルにおける精神障害者支援 自分研究
- 第7回 ベテルにおける精神障害者支援 降りていくという生き方
- 第8回 リカバリー思想 ロサンゼルス・ビレッジの活動から 希望、エンパワメント
- 第9回 リカバリー思想 ロサンゼルス・ビレッジの活動から 自己責任、生活のなかの有意義な役割
- 第10回 ストレングスモデル 歴史、批判、有益な概念
- 第11回 ストレングスモデル ストレングスの基礎理論
- 第12回 ストレングスモデル 目的、原則、研究成果
- 第13回 嗜癖問題 総論
- 第14回 嗜癖問題 アルコール依存

第15回 嗜癖問題 嗜癖と家族

授業の予習・復習

毎回、課題を出します。その課題について講義の中で議論します。

使用教材

太田順一郎・岡崎伸郎『メンタルヘルスライブラリー33 精神保健福祉法改正』批評社

マーク・レーガン『ビレッジから学ぶリカバリーへの道』金剛出版

チャールズ・A・ラップ『ストレングスうモデル リカバリー志向の精神保健福祉サービス』金剛出版

ジャネット・G・ウオイテツ『アダルト・チルドレン アルコール問題家族で育った子供たち』金剛出版

向谷地生良『技法以前 私は何をしてこなかったか』医学書院

アンソニー・ギデنز『親密性の変容』而立出版

随時配布資料

評価方法

授業中の課題提出(30%)、期末レポート(70%)で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワーは随時、受講生と相談しながら決めていきます。

前年度の授業評価

精神保健福祉の歴史が良く理解できた。精神科ソーシャルワークの方法について学べたなどの評価があります。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|-----------|-------|------|----|
| 臨床発達心理学特講 | 蓑毛 良助 | 前期 | 2 |

ナンバリングコード

M_WEL511430

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

テーマ: 対人援助の理論と実践力を高める。

概要

人間の発達段階別(胎児・乳児・児童・青年・成人・高齢期)に、その特性を、身体・視覚・聴覚・知能・学力・言語・情緒・社会性の視点から明らかにする。また、発達援助の為に、実態把握、評価(アセスメント)、仮説の設定、治療プログラムの作成、実施、結果の分析、考察という手順を説明する。

一方、心理検査(知能検査、性格検査他)や心理療法(来談者中心療法他)を説明し、討論する。講義後、討論・講義感想文・レポート等でフィードバックして進める。

キーワード

臨床心理学、発達心理学、心身障害学、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

到達目標: 対象者の実態把握と指導方法の理論と実践を知る。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、人間の成長発達と心理的理解
- 第2回 胎児・乳児の発達、国内外の論文講読
- 第3回 乳児・児童の発達、国内外の論文講読
- 第4回 青年・成人の発達、国内外の論文講読
- 第5回 高齢者の発達課題、国内外の論文講読
- 第6回 視覚障害児(者)の心理、国内外の論文講読
- 第7回 聴覚障害児(者)の心理、国内外の論文講読
- 第8回 知的障害児(者)の心理、国内外の論文講読
- 第9回 肢体不自由児(者)の心理、国内外の論文講読
- 第10回 病虚弱児・内部障害者の心理、国内外の論文講読
- 第11回 言語障害児(者)の心理、国内外の論文講読
- 第12回 情緒・精神障害者の心理、国内外の論文講読
- 第13回 発達障害児の心理、国内外の論文講読
- 第14回 事例研究
- 第15回 まとめ

授業計画の内容

臨床発達心理学の理解については、テキストや資料、視聴覚教材を活用して講義する。また本学の児童相談センターでの臨床実習、施設・学校・各種の相談所の見学も取り入れて、実際にクライアントを担当し、指導計

画(治療プログラム)を立て、実践し、ケース会議で検討するという形式をとり、理論と実践の統合を究めたいと考えている。

授業の予習・復習

講義に関する論文は、前もって渡すので予習しておくこと。当日の論文の復習をするともに関係する論文も読んでおくこと。

使用教材

馬場禮子(2005)『臨床心理学概説』放送大学教育振興会
滝口俊子(2007)『心理臨床の世界』放送大学教育振興会
石部元雄他編(2008)『特別支援教育』福村出版

評価方法

毎回の受講態度・レポート発表の内容で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

「オフィス・アワー」等については、面接の上で決定する。

前年度の授業評価

講義の評価では、ビデオなどの視聴覚教材を活用してわかりやすかった。テーマに関する論文が最新で適切だった。討論を導入して参加型の講義で主体的に取り組む事ができた。以上のように好評であった。今年度も受講生の実態や希望を聞きながら、受講生が主体的に参加できる講義を展開したいと考えている。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|---------|--------|------|----|
| 生涯教育学特講 | 千々岩 弘一 | 後期 | 2 |

ナンバリングコード

M_WEL513790

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

授業のテーマ

生涯にわたる人間の学び

概要

本講義では、福祉的視点と絡めながら、人間の成長に伴って展開される学習のあり方について考えていく。具体的には、以下のような骨格で講義していく。

1. 我が国の教育政策の概観
2. 発達段階に即した学びの動向に関する概観
3. 福祉的視点と学びのあり方に関する考察
4. 地域社会と教育をめぐる諸問題への追究

なお、本講義では、受講生の関心の中核に、相互の意見交換などを積極的に取り入れた活動型の展開を工夫する。

キーワード

アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

福祉的視点と絡めながら捉え、人間としての生涯にわたる学びのあり方について理解する。

授業計画

本講義は、概ね以下のような展開を考えている。

- 第1時 オリエンテーション(講義の目的・目標、内容、方法、評価についての説明)
- 第2時 我が国の教育政策の概観(1)教育関連法規
- 第3時 我が国の教育政策の概観(2)教育行政組織
- 第4時 生涯教育の諸相の概観
- 第5時 生涯教育に関わる諸問題(1)ー幼児・児童・生徒の発達段階と教育をめぐる諸問題ー
- 第6時 生涯教育に関わる諸問題(2)ー「言語」の機能と人間の発達ー
- 第7時 生涯教育に関わる諸問題(3)ー幼児期・学齢期における「読書」の意義ー
- 第8時 生涯教育に関わる諸問題(4)ー実年期における「読書」の意義ー
- 第9時 生涯教育に関わる諸問題(5)ー老年期における「読書」の意義ー
- 第10時 生涯教育に関わる諸問題(6)ー感性の育成ー
- 第11時 生涯教育に関わる諸問題(7)ーマナーとモラルを踏まえた徳育の在り方ー
- 第12時 生涯教育に関わる諸問題(8)ー本能的諸問題の取り扱いー
- 第13時 生涯教育に関わる諸問題(9)ー障がい者と学びー
- 第14時 生涯教育に関わる諸問題(10)ー高齢者と学びー
- 第15時 人間の発達と教育の有効性に関する総括的考察

授業の予習・復習

必要に応じて出された課題に関する文献を読んだり、自分なりの意見をまとめたりしておくこと。

使用教材

必要に応じてプリントを配布したり、参考文献を紹介したりする。

評価方法

受講態度及び必要に応じて課すレポートの質によって、総合的に評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

必要に応じて個別の対応も行う予定である。

前年度の授業評価

受講生にニーズに真摯に応えていきたい。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|---------|-------|------|----|
| 職業教育学特講 | 吉留 久晴 | 後期 | 2 |

ナンバリングコード

M_WEL513752

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

職業教育の理論と実態

概要

本授業では、「国際比較」と「学校から職場への移行過程」という観点から、日本の中等教育段階及び高等教育段階における職業教育の特徴を考察する。なお、授業では、まず受講者に下記のテキストを分担報告してもらったうえで、必要な説明や補足、意見交換などを行う。

キーワード

職業教育、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

1. 職業教育に関する重要な知識・知見を習得することができる。
2. 職業教育に関する現状や諸問題について把握することができる。
3. 職業教育のあり方について多角的に考察することができる。

授業計画

1. 職業教育論を学ぶ意義
2. 職業教育の概念
3. 職業教育の比較史
4. 職業教育の理念
5. 職業教育の国際基準
6. 職業教育の国際比較
7. 高校職業教育の教育課程
8. 高校における現場実習
9. 高校職業教育と就職の関連構造
10. 高等教育における職業教育
11. 企業における教育訓練
12. 職業教育教員の養成
13. 職業教育の改革
14. 今後の職業教育(研究)の課題
15. 総括

授業の予習・復習

各授業後に合計で4時間程度の復習を行うこと。

使用教材

寺田盛紀『日本の職業教育』晃洋書房、2009年、2700円(税抜)

※受講予定者は、上記テキストを事前に各自で注文・購入し、初回の授業の際に持参すること。

評価方法

テキストの分担報告の内容(40%)とレポートの内容(60%)により評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業外での質問等には、研究室で対応する。

前年度の授業評価

該当なし。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|---------|-------|------|----|
| 介護福祉学特講 | 田中 安平 | 前期 | 2 |

ナンバリングコード

M_WEL513690

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

特定の対象者に対する理解を深め、円滑な支援が行えるように、受講生が各自体験してきた事例を演習課題として提案することで身につける。社会福祉も介護福祉も実践学であり、実践に役立つ理論を再構築する。

概要

特定の対象者を理解するための理論と支援する方法について、受講生各自が準備してきた事例(課題)等を発表することにより学習する。そのことで、認知症高齢者や家族介護者の心理や生活環境、介護の専門家である介護福祉士の介護の倫理・介護の哲学を理解できるようになる。

サービス利用者と援助者の関係は、障害児・者、高齢者と、発達段階や障害の形態によっても異なり、施設サービスや居宅サービスのように、サービスを受ける場所によっても異なることを理解できる授業形態とする。

介護福祉学は、介護という臨床の場に対応できる学問でなければならない。理論のための理論では意味をなさない。社会福祉士として適切なサービスを利用者に提示できるためには、適切な介護を理解する必要がある。これらのことを了解したところのアセスメントでなければ、ケアをマネジメントする段階で利用者主体のプランを作成することは困難になることを了解できる講義内容とする。

本講座は講座自体が課題に対するフィードバックとなっており、従来の一方通行的な講義とは異なるアクティブラーニングの形式を取り入れている。

キーワード

対象者理解、利用者主体、地域包括支援センター、チームケア、アクティヴ・ラーニング

授業の到達目標

受講生が各自作成した事例を講義の資料とすることで、事例作成の習熟につながり、適切な事例を作成することができるようになる。それぞれの受講生の事例を検討することで、自分が勤務している職種に特有な課題だけでなく、様々な社会問題や利用者に関する理解ができ、ソーシャルワーカーとしての幅広い技能を身につけることができる。社会福祉も介護福祉も実践学であり、実践に役立つ理論と実践方法を身につけることができる。

授業計画

第1回:高齢者の疾病・障害の理解(講義)

第2回:対象者への支援の展開1(受講生の事例1(高齢者等):講義・演習)

第3回:対象者への支援の実際1-1(受講生の事例2(認知症等):講義・演習)

第4回:対象者への支援の実際1-2(受講生の事例3(認知症等):講義・演習)

第5回:対象者への支援の展開2(受講生の事例4(障害・虐待等):講義・演習)

第6回:対象者への支援の実際2-1(受講生の事例5(障害・虐待等):講義・演習)

第7回:対象者への支援の実際2-2(受講生の事例6(障害・虐待等):講義・演習)

第8回:地域包括支援センターにおけるチームケアのあり方について(講義・演習)

第9回:看護とケア:介護の本質(介護のベクトルと看護のベクトルの差異について)

第10回:介護とケア:他者をケアすること。自己のケア

第11回:介護と介護福祉:概念整理

第12回:感情労働としてのケア:バーンアウトと共感疲労

第13回:生と死について:自然死にみる尊厳死

第14回:介護の哲学:臨床哲学としての介護

第15回:ケアカウンセリング:介護の専門性におけるケアカウンセリングとは。ソーシャルワークにおける相談援助技術とカウンセリング、ケアカウンセリングの差異。

授業の予習・復習

講義の資料として、受講生による事例が使用されます。講義前に、事例検討用の資料を作成する必要があります。資料作成を講義の予習とし、講義後の実践体験を復習として、次回の講義で発表してもらいます。実践学としての講義とします。

使用教材

特定の教材を使用することはない。受講生成成の事例を使用テキストとする。必要に応じて資料を準備し、資料を基に模範解答のない正解の有り様についてについて討論する。

評価方法

評価方法

①平常点 30% ②発表等授業参加 20% ③レポート 50%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

講義で使用する事例を作成し、提出すること。

事例等は評価の対象とする。

授業に対する熱意等は減算で対応する(最大30%)。

講義等に関する質問等は、メールにて受け付ける。yasuhira@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

今年度は業種の異なる受講生が2人おり、事例(提出課題)に対する異なる視点からの意見を聞くことができ、学びを深めることができた。実践現場における具体的な問題を提起してもらうことで、様々な角度からの意見等に対する有効性等の反応が聞かれ、課題解決に向けての活発な議論がなされた。次年度も、受講生同士による討論がなされることを期待する。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|---------|-------|------|----|
| 社会保障論特講 | 田畑 洋一 | 前期 | 2 |

ナンバリングコード

M_WEL513640

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

講義(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

社会保障の政策原理に関する基礎的研究

- 1) 社会保障の基本的事項の整理
- 2) 各国の社会保障の基本原理の理解
- 3) 日・独の介護保障の分析

概要

本講では、社会保障制度を分析・検討し、安定維持的な制度への改革を展望する。そもそも社会保障は、対象者の普遍性、全生活生涯を網羅する包括性、保障の統一性を追及すべきであって、既存の制度の継ぎ接ぎであってはならない。この理念からすれば、社会保障の断片的で不整合な制度については、統合化・統一化に向けての再検討・再構築がなされなければならないと思う。ここでは社会保障の基本的事項をふまえ、受講者のテーマに沿いつつ、社会保障の政策原理に関する検討を行う。

キーワード

社会保障の原理・介護保障・要介護認定、テーマ設定方針

授業の到達目標

- 1) 社会保障の基本的事項の整理を行う。
- 2) 各国の社会保障の基本原理の理解を深める
- 3) 日独の介護保障の分析を行い、制度改革の展望を行う。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 問題の所在と研究課題
- 第3回 各自の研究計画の発表
- 第4回 社会保険と関連制度
- 第5回 ドイツ社会保障の原理
- 第6回 保険原理・援護原理・扶助原理
- 第7回 ドイツ介護保険法
- 第8回 要介護認定の日独比較
- 第9回 要介護認定の日独比較
- 第10回 要介護度と給付の日独比較
- 第11回 要介護度と給付の日独比較
- 第12回 生活保護と介護保険の日独比較
- 第13回 生活保護と介護保険の日独比較
- 第14回 介護と仕事
- 第15回 社会保障の実践課題

授業の予習・復習

- ◇授業前後に必ず4時間程度の予習・復習をすること。
- ◇第1回授業時には各自の研究計画書を提出すること。
- ◇生活の中の社会保障を具体的に考え報告できるようにすること。

使用教材

- (1)Gohde,J.(2013)Reformbedarf der Pflegeversicherung,G+S.
- (2)Katrin Mohr(2007)Soziale Exklusion im wohlfahrtsstaat vs verlag für sozialwissenschaften.
- (3)Bundesministerium für Gesundheit, Zahlen und Fakten zur Pflegeversicherung. (20. Januar 2016).
- (4)田畑洋一(2014)『現代ドイツ公的扶助序論』学文社.
- (5)田畑洋一他編著(2016)『社会保障―生活を支える仕組み』学文社.

評価方法

報告内容・研究姿勢などにより総合的に評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ①出身学部が福祉系学部でなかった等の理由で、社会福祉概論・社会保障論等の社会福祉基礎科目を履修していない者は、本学学部でそれらの科目を聴講するようにして欲しい。
- ②オフィス・アワーについて開講時に指示する。

前年度の授業評価

社会保障の政策課題については理解が深まった。シラバスどりの授業進行にはならなかったが、各自の研究テーマについての問題意識や研究発表の仕方や投稿論文のまとめ方・書き方については理解が深まったと思う。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|----------|-------|------|----|
| 社会福祉法制特講 | 田畑 洋一 | 後期 | 2 |

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

講義(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

介護保険法—ドイツと日本の比較研究

- 1)介護保険の基本原則
- 2)要介護認定と給付

概要

本講では、社会福祉を巡る法的課題について、ドイツの介護保険法と日本の介護保険法を比較検討する。ここでは制度のあり様に関係する包括性・普遍性と、制度化の背景にある選択可能性・科学性・効率性との関係のあり方を基本的視角として設定する。具体的には、①どのような脈絡で論点が設定され、②どのように説明されることによって具体的な結論が得られたかについて、③制度創設時以降の経緯を踏まえて検討し、④介護保険制度の基本的課題を探求するという方法を採用する。なお、受講者の問題関心により内容を一部変更する場合があります。

キーワード

介護保険の基本的枠組み、要介護認定、保険給付、介護従事者

授業の到達目標

- 1)ドイツ介護保険の基本的枠組みを理解する
- 2)日独の要介護認定の考え方の差異と要介護度と給付の検討する
- 3)日独の介護従事者を考える

授業計画

- 第1回受講者の問題意識の確認(構想発表:その他欄参照)
- 第2回社会福祉法制の体系と構造
- 第3回社会福祉の権利・義務関係
- 第4回高齢期のニーズと介護保険
- 第5回ドイツ社会保障の原理
- 第6回ドイツ介護保険の基本原則
- 第7回ドイツ介護保険の要介護概念
- 第8回ドイツ介護保険の要介護と給付
- 第9回日本介護保険の仕組み
- 第10回日本介護保険の要介護認定
- 第11回日本介護保険の給付
- 第12回日本介護保険の基本的課題
- 第13回日本とドイツの介護保険の類似点と相違点
- 第14回日本とドイツの介護従事者の状況
- 第15回講義全体に関する自由討論

授業の予習・復習

- ◇授業前後に必ず4時間程度の予習・復習をすること
- ◇第1回授業に研究計画書を提出すること

◇介護問題について日常的に考え報告できるようにしておくこと

使用教材

社会保障法学会編『地域生活を支える社会福祉』法律文化社,2012.

Deutscher Caritasverband(Hg.),SGBXI,Soziale Pflegeversicherung nach dem PSGⅢinkl. Ⅱ Hilfe zur Pflege Ⅱ(SGBXII,7.Kapitel).1.Januar 2017.

評価方法

報告内容・研究姿勢などに拠り総合的に評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

◇第1回授業時に資料を配布するので毎回それを持参すること

◇適宜、各自の研究テーマに沿った授業を行ったり、受講者の都合により授業時間を変更したりすることもある

前年度の授業評価

本年度からの担当である。他の担当科目と同様、シラバスを基本としながら、各自の関心事についても指導する。とくに論文の書き方・まとめ方が身につくよう指導する。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|----------|-------|------|----|
| 社会福祉政策特講 | 鬼崎 信好 | 集中 | 2 |

ナンバリングコード

M_W513691

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

- ◆高齢者ケアシステムの在り方を考える
- ◆保健福祉サービスの提供組織の役割を考える

概要

20世紀は多くの先進工業国にとって、経済の高度成長の時代であり、成長の論理で社会システムの構築を考えれば良かった。社会福祉の分野でいえば、国民の一人ひとりに高度経済成長による富・果実をどのように分配するのか、社会保障・社会福祉の分野にどのように予算化するかが大きな政策課題のひとつになっていた。

しかし、1990年代以降、わが国においては急激な人口の少子化・高齢化が進行し、21世紀における社会システムの構築が喫緊の課題となった。高齢者保健福祉の分野では、「2015年問題」「2025年問題」という言葉に象徴される課題が浮上してきている。2025年問題についていえば、地域包括ケアシステムの具体化が大きな政策課題となっている。すなわち、地域社会レベル(市町村)で、医療・介護・予防・住まい・生活支援が一体的に提供されることが求められるようになっている。

そこで、本講義では社会福祉政策をマクロレベル、ミクロレベルから論点を整理していくことにする。

キーワード

福祉国家、福祉社会、高齢者ケアシステム、高齢者保健福祉制度、介護保険制度、包括ケアシステム、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

- ◆ 社会福祉学理論と実践の枠組みを理解する。
- ◆ 社会福祉政策・制度の変遷を理解する。
- ◆ 海外(主として北欧の国々、イギリス、アメリカ)の社会福祉制度を理解する。

授業計画

- 第1回 社会福祉学の理論(その1)
- 第2回 社会福祉学の理論(その2)
- 第3回 社会福祉の選別主義と普遍主義
- 第4回 社会福祉の理念、現実認識の構造
- 第5回 社会福祉政策の視角
- 第6回 わが国の社会福祉政策(その1)
- 第7回 わが国の社会福祉政策(その2)
- 第8回 社会福祉の財源、調達方法
- 第9回 海外の社会福祉(デンマーク)
- 第10回 海外の社会福祉(デンマーク)
- 第11回 海外の社会福祉(スウェーデン)
- 第12回 海外の社会福祉(フィンランド)
- 第13回 海外の社会福祉(イギリス)

第14回 海外の社会福祉(アメリカ)

第15回 総括

授業の予習・復習

指定する資料を精読して、必ず質問を3つ記しておくこと

使用教材

講義の際に配布する資料

世界の社会福祉年鑑(最新版)旬報社

鬼崎信好ほか編『世界の介護事情』中央法規出版、2002

『厚生労働白書』各年版

『世界の労働福祉白書』各年版

厚生労働省の関係資料(介護保険担当課長会議資料等)

その他は講義の際に指示する。

評価方法

レポートにより評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

教員の一方的な講義に陥らないように、振り返りシートを用意し、質問等の記入を求める。

前年度の授業評価

昨年度は開講していない。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|---------|-------|------|----|
| 地域福祉学特講 | 高橋 信行 | 前期 | 2 |

ナンバリングコード

M_WEL513697

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

地域における福祉計画の策定や住民活動、ボランティア活動の方法を学ぶ

概要

研修目標

- ①鹿児島県内自治体における機関間連携の仕組み、インフォーマル活動を含む社会資源の実態、福祉政策の形成過程、福祉計画等について把握させるとともに、地域における自組織の役割の理解、地域の様々な地域の生活課題や福祉ニーズを発見させる。
- ②住民活動・ボランティア・NPOの支援の方法を学ばせる。
課題レポートについては、提出後コメント等を行う。

キーワード

アクティブ・ラーニング、アクションリサーチ、コミュニティワーク

授業の到達目標

到達目標

- ①鹿児島県内の地域の福祉システムを把握している。地域の生活課題、福祉ニーズを踏まえて、地域における自組織の役割について説明できる。地域の課題やニーズ、社会資源についてアセスメントできる。アセスメントに基づいて、地域介入の目標と方法を選ぶことができる。
- ②地域における住民活動やボランティアの受け入れ、コーディネート等のボランティア・NPO支援の方法を学び、地域福祉活動を推進できる。

授業計画

第1回 福祉計画と地域社会 講義

福祉計画の特徴と種類、また全国と鹿児島県における策定の実態について学ぶ。行政計画か否か、総合計画か個別計画か、根拠法があるか、市町村主体か否か、義務計画か否かなどを基準に、福祉計画の特徴をみる。また地域福祉計画策定率の低い鹿児島県の問題点などを議論する。

第2回 福祉計画の制度的背景 講義

老人保健福祉計画にはじまる行政計画の背景にある法的規定、民間計画も含めた背景について説明する。

第3回 福祉計画の実際と策定プロセス 講義

地域福祉計画や障害福祉計画の策定事例を使いながら、そのプロセスについて説明する。

第4回 実態(ニーズ)把握の方法Ⅰ(質的調査法)演習

質的データ処理の方法、インタビュー調査のまとめかた等について、事例を交えて演習する。十島村や南大隅町のデータを使用する。

第5回 実態(ニーズ)把握の方法Ⅱ(量的調査法)演習

調査票の作成、集計方法、分析方法について、実際の調査票を題材にしながら学ぶ。十島村や南大隅町のデータを使用する。

第6回 調査結果を施策に活かす 演習

十島村等の調査結果の分析を通して、事業の開発、福祉計画の策定について学ぶ。

第7回 住民福祉活動 講義

特にふれあいサロンや小地域ネットワーク活動、NPOの自主的活動ーホームレス支援活動などに焦点をおいで講義する。

第8回 前半 ボランティア活動の実態把握(講義)

県内ボランティア活動の数的実態と活動を事例を含め学ぶ。

第8回後半 住民活動支援(講義)

住民の主體的な地域活動、奉仕活動について、その支援方法を行政や社会福祉協議会の立場から説明する。

第9回 ボランティアマネジメントと実際(講義)

ボランティア活動のマネジメントの仕方を事例を交えて学ぶ。

第10回 ボランティアコーディネートの実際(講義)

ニューズ資源調整の視点から「奄美災害」等を事例に使いながら、災害支援についてボランティアコーディネートの方法や課題等について学ぶ。

第11回 地域プログラム開発の実際(演習)

鹿児島で最も高齢化が進む、南大隅町を例にとりながら、課題の発見から新しい事業開発を、特定ケースの実例を使いながら演習を通して学ぶ。

第12回 小地域活動と見守り・声かけ (講義)

小地域活動として、高齢者等の見守り、声かけのネットワーク活動の実際を鹿児島県下での実践ー在学アドバイザーの事例ーを通して学ぶ。

第13回 ふれあいサロンと支え合い活動(講義)

地域活動としてのふれあいサロンの背景や実際、その活動を地域支え合いの視点から学ぶ。鹿児島市の実施しているお達者クラブを例にとる。

第14回 地域住民と関係機関の連携

(講義)

地域住民と専門職の連携活動(ネットワークのあり方)の実際を事例に使いながら学ぶ。特に行政と社会福祉協議会が行っている平成24年より実施している暮らし安心地域支え合い活動を事例にとりながら説明する。

第15回 地域福祉活動の推進(講義)

地域福祉活動を進める上でのワークショップ法について、これまでの事例を例に学ぶ。

授業の予習・復習

授業資料は1週間前までにアナウンスができるようにし、自己学習ができるようにしておく。課題等を含め4時間程度の予習・復習を行う必要がある。

使用教材

テキストは特に指定しない。資料配付。参考文献として以下に示す。

1. 『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』河合克義 法律文化社 2009
2. 『孤独なボウリングー米国コミュニティの崩壊と再生』ロバート・D. パットナム(著), Robert D. Putnam(原著), 柴内 康文(翻訳) 柏書房(2006/04)
3. 『ソーシャルキャピタルー信頼の絆で解く現代経済・社会の諸問題』稲葉陽二2007生産性出版
4. 『安心社会から信頼社会へー日本型システムの行方』(中公新書) 山岸 俊男 1999

以下、鹿児島国際大学地域総合研究所の「地域総合研究」でダウンロードできる高橋の参考文献等

<http://www.iuk.ac.jp/chiken/backnumber.html>

研究ノート(PDFファイル)

ひとり暮らし高齢者の社会的孤立ー鹿児島県の過疎地と離島の違いに焦点を当てて

第41巻第1号 /2013年10月

論文

ひとり暮らし高齢者の社会的孤立2

—地方都市、過疎地域、離島における実態— (PDFファイル) 高橋 信行(1)
第40巻第1号 / 2012年9月

論文

ひとり暮らし高齢者の社会的孤立

—地方都市、過疎地域、離島における実態 (PDFファイル) 高橋 信行(1)

論文

十島村の地域福祉のあり方

—住み慣れた地域で安心して暮らすこと— (PDFファイル) 高橋 信行(1)

第39巻第1・2号 合併号/2011年12月

地域福祉活動計画と住民参加

—隼人町地域福祉活動計画の軌跡— 高橋信行(67)

第33巻第2号

評価方法

修了要件

- ・授業の出席100% (やむを得ず講義に出席できない場合はレポートで代替するが、代替できるのは全体の20%を上限とする)。
- ・やむを得ない遅刻は授業開始から30分までとする。30分を過ぎた場合は欠席とする。遅刻3回で欠席1回とみなす。30分以上の早退も同様とする。
- ・最終レポートを提出し合格すること。不合格の場合は1回の再提出を認める。

修了評価

- ・レポート課題の提出。
 - ①地域社会の生活課題・福祉ニーズを理解し、社会資源についてアセスメントができること、それにもとづいて地域介入方法を選択できる力
 - ②地域福祉活動の理解、コーディネートの方法の理解の習熟度を審査する。
 - ・レポート評価は100点満点で評価し、70点以上であること。
- レポートは全体評価の80%として、平常点10%、発表10%とする。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

本講義のスタイルは、教員が資料をもとに説明を加え、そのうち受講生からの質問に応じるという形式を基本とする。

また視聴覚教材を多用したいと考えている。高橋の方で、行ってきた地域福祉実践の事例も使いたいと考える。また特定の地域福祉テーマについて議論したい等のリクエストがあれば、できるだけ応じることとする。

講義終了後の時間帯をオフィスアワーとして使用する。連絡等が必要な場合は以下のアドレスにお願いしたい。
nobu@soc.iuk.ac.jp

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|---------|-------|------|----|
| 社会病理学特講 | 佐野 正彦 | 後期 | 2 |

ナンバリングコード

M_WEL513680

使用言語

英語文献を用いるが、授業は日本語で行う。

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

社会病理学ないし犯罪社会学に関わる基本的視角(パースペクティブ)理解する。

概要

19世紀末のリエンフェルト、デュルケムなどの論者たちに始まり今日に至る社会病理学の発展史のなかで、もっとも大きな理論的画期の一つは、1960年代後半から70年代にかけて席捲した「レイベリング論(labeling theory)」の登場である。この理論の特徴の一つは、犯罪・非行などの社会病理現象をその行為主体の属性やこの主体を取り巻く環境だけに帰属させるのではなく、当該行為を社会病理として認定する専門家などの認定主体をも論及対象として措定しているところにある。本特講の目的は、こうしたレイベリング論のパースペクティブ(視座)を批判的に検討することを主な導きの糸としつつ、社会病理学全般の潮流を理解することにある。本年度は、今後の研究活動の発展と博士後期課程の進学準備に配慮して「英文論文」を少なくとも1本を熟読します。

キーワード

社会病理、逸脱、スティグマ、レッテル貼り、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

社会病理学ないし犯罪社会学に関わる基本的視角(パースペクティブ)を身につけ社会現象を分析・説明できるようにする。

授業計画

- 第01回 オリエンテーション 「社会病理学」の特徴
- 第02回 古典学派の犯罪学——ベッカリアとベンサム——
- 第03回 ロンブローゾの実証的犯罪学
- 第04回 デュルケムの犯罪論
- 第05回 社会解体論とシカゴ学派社会学
- 第06回 文化葛藤論
- 第07回 分化的接触の理論
- 第08回 マートンのアノミー論
- 第09回 非行サブカルチャー論
- 第10回 分化的機会構造論
- 第11回 少年の漂流と中和の技術論
- 第12回 ラベリング論
- 第13回 ハーシのボンド論
- 第14回 環境犯罪学
- 第15回 「社会と犯罪」を考える。

授業の予習・復習

授業前には該当する箇所を必ず読んでくること。

また、授業後には分かったことと、よく分からなかったことを整理して、理解を深めるように心がけるすること。

使用教材

「英文論文」及び「英文テキスト」をこちらで用意します。ですから、テキストは特に準備しなくてけっこうです。また、参考文献については、授業中に適宜紹介します。

評価方法

「平常点 50 %、レポート 50 %」の割合で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワー等につきましては初回の授業時にお知らせいたしますが、質問・相談は随時受け付けていますので、希望者はメール連絡をしてください。msano@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

英語文献を輪読する形の授業であったのでなかなか大変であったが、訳して考える作業が案外理解を深められたかも知れない。

レッテル貼り(ラベリング論)の英語文献議論を読むことで、これまで自明視されていた「逸脱者＝悪者」的な見方がある程度相対化することができた。

履修者は社会人入試により入学したため、英語に対する苦手意識があると思われるが、この意識を少し壊すことができたように思う。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|----------|-------|------|----|
| 社会福祉調査特講 | 小窪 輝吉 | 前期 | 2 |

ナンバリングコード

M_WEL510027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

社会福祉調査の分析と整理の仕方について学ぶ

概要

データ収集の方法には質問紙調査法、観察法、面接法、記録文書法などがあるが、これらは扱うデータの種類によって量的調査と質的調査に大別される。本講義では社会福祉調査における量的調査・質的調査の実施とデータの整理および調査レポートの作成の仕方を取り上げる。

量的調査では、質問紙法調査のプロセスを概観しながら、データ集計と結果の整理の仕方を中心に実習形式で学んでもらう。具体的にはワードで質問紙を作り、データをエクセルで入力し、統計ソフトであるSPSSやRで集計し、その結果をエクセルで表とグラフに表し、ワードで調査レポートを作るという一連の技法を習得してもらう。質的調査では、質的調査法の概要と質的データの整理方法を中心に扱う。最後に、パワーポイントでの発表の仕方について学ぶ。

課題やレポートについては修正が必要なところをその都度指摘して完成してもらう。

キーワード

量的調査、質的調査、統計ソフト(SPSS、R)、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

調査データの収集と分析・整理ができる。調査レポートを作成することができる。

授業計画

- 第1回 社会福祉調査とは何か。量的調査について
- 第2回 エクセルによる表と図の作成
- 第3回 ワードによる質問紙の作成
- 第4回 SPSSによるデータ入力とデータのクリーニング
- 第5回 SPSSによるデータ集計1 記述統計代表値
- 第6回 SPSSによるデータ集計2 記述統計クロス集計、相関係数
- 第7回 SPSSによるデータ集計3 推測統計と多変量解析
- 第8回 Rコマンドによるデータ集計1 データの作成と読み込み
- 第9回 Rコマンドによるデータ集計2 単純集計、検定
- 第10回 研究レポートの作成1 レポート概要と集計
- 第11回 研究レポートの作成2 集計結果の整理と記述
- 第12回 プレゼンテーション1 スライドの作成
- 第13回 プレゼンテーション2 発表
- 第14回 質的調査について
- 第15回 質的データの整理・分析

授業の予習・復習

パソコンの操作の復習をしておくこと

使用教材

テキストはありません。以下のものを参考文献とします。

土田昭司・山川栄樹 2011 新・社会調査のためのデータ分析入門 ―実証科学への招待 有斐閣

内田治 2007 『すぐわかるSPSSによるアンケートの調査・集計・解析』東京図書

船尾暢男 2008 『R Commander ハンドブック』オーム社

緒賀郷志 2010 『Rによる心理・調査データ解析』東京図書

K・F・パンチ 川合隆男監訳 2005 社会調査入門 慶應義塾大学出版会

谷富夫・芦田徹郎編 2009 よくわかる質的調査 技法編 ミネルヴァ書房

新睦人・盛山和夫 2008 『社会調査ゼミナール』有斐閣

評価方法

授業中の課題提出(30%)と期末レポート(70%)により評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

パソコンの基礎的操作(ファイルのコピー、フォルダ作成等)ができるようにしておいてください。

オフィスアワー等につきましては授業のときにお知らせします。

担当者(小窪)のアドレスは「tkokubo@soc.iuk.ac.jp」です。

前年度の授業評価

受講者の修論作成に必要なところを中心に授業をしたので関心に応えるような授業ができた。

仕事を持っていると欠席をするケースが出てくる。そうなることと進度を緩める必要が出てくるので授業展開を効果的に行うのが難しいときがあった。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|------------|-------|------|----|
| フィールドワーク実習 | 高橋 信行 | 前期 | 1 |

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語による授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

地域コミュニティ協議会設立におけるコミュニティプラン策定について

概要

現在、各地で、地域コミュニティ協議会の設立が、行政主導で行われている。

本来、コミュニティ協議会は、地域コミュニティのさまざまな活動を含み、地域住民によるまちづくりの一環として行われるものであるが、実際には、行政サイドの設立マニュアル等によって策定が進められていることも多い。鹿児島県においては、それまでの町内会、校区公民館活動や校区社会福祉協議会等の再編としての意味も持っている。

地域コミュニティ協議会設立が求められるようになった背景は、少子高齢化や核家族化、都市化当の影響でコミュニティ意識が希薄化し地域活動への参加が減少してきており、役員の担い手不足などの問題がと言われ、行政施策としても力が入られ、すでに鹿児島市においてはすでの協議会が立ち上がっている地区もある。設立に際しては、住民調査によって課題やニーズの把握が行われるが、調査計画が十分に立てられず、完成度の低い調査になっているケースも散見される。

ここでは、鹿児島市宇宿地区の協議会設立にかかわりながら、アクションリサーチの手法を使い、調査の企画から実行、そして報告までの過程を実施する。

課題については、メモ等使ってフィードバックを行う。原則として授業におけるレポート等に関してはその後の授業またはEメールにてフィードバックを行う。

キーワード

コミュニティ、地域コミュニティ協議会、アクションリサーチ、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

- 地域コミュニティ協議会の設立過程を理解できる
- 質的調査法について、理解し、実施できる
- 量的調査法について、理解し、実施できる
- 調査を行い、それを報告書にまとめることができる
- アクションリサーチの意義を理解できる

授業計画

- ①オリエンテーションと社会調査のプロセスについての基礎理解(質的研究法)
- ②社会調査のプロセスについての基礎理解(量的研究法)
- ③地域コミュニティ協議会についての基礎学習
- ④アクションリサーチについての基礎学習
- ⑤地域住民や福祉関係者からの聞き取り
- ⑥アンケート調査項目の作成1
- ⑦アンケート調査項目の作成2

- ⑧アンケート調査の実施(回収)
- ⑨データファイルの作成(Excel&SPSS使用)
- ⑩アンケートデータの入力(Excel&SPSS使用)
- ⑪アンケート結果の集計・分析(SPSS使用)
- ⑫アンケート調査の集計・分析(SPSS使用)
- ⑬報告書の作成1
- ⑭報告書の作成2
- ⑮報告会での報告

授業の予習・復習

当該講義箇所の復習と次回予定箇所のアナウンスを行い、宿題等を課す。事前事後学習を含めて4時間程度を必要とする。

使用教材

授業時に指示する。

評価方法

○授業での平常点 ○調査時のスキル(フィールドワーク) ○集計・分析の力 ○報告書の作成力
それぞれを25%で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

この授業は、学外でのフィールドワーク体験を含む。

Eメールアドレス 高橋 nobu@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

2年目の科目であるが、1年目の評価はまだ行っていない。今年度より実施。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|----------------|-------|-------|----|
| 特別研究(演習)修士論文指導 | 岡田 洋一 | 1～2年次 | 8 |

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

メンタルヘルスの問題をソーシャルワークの視点から研究し、修士論文の作成に必要な知識・研究方法を学びます。

概要

- ・メンタルヘルスの問題についてソーシャルワークの視点から学びを深める事を中心に授業をすすめていく。
- ・情報収集の方法など論文作成について学ぶ。
- ・それぞれのテーマに沿ったレポートを毎回提出してもらう。

キーワード

メンタルヘルス、ソーシャルワーク、リサーチ、研究

授業の到達目標

- ・メンタルヘルスの問題をソーシャルワークの視点で展開していく力を身につける。
- ・関心のある問題について整理し解釈していく力を身につける。
- ・論文作成の方法を理解し身につける。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション・大学院での学習について
- 第2回 オリエンテーション・メンタルヘルスとソーシャルワークについての概観
- 第3回 テーマについての学生発表
- 第4回 研究方法・卒業論文をどのような研究方法で書いてきたか学生発表
- 第5回 研究方法・具体的な論文についての抄読
- 第6回 研究方法・研究方法の発展
- 第7回 研究テーマの設定 ソーシャルワークの使命
- 第8回 研究テーマの設定 価値、倫理について
- 第9回 研究テーマの抽出方法
- 第10回 研究の動機と目的
- 第11回 研究の背景と意義
- 第12回 研究の概念枠組みの設定
- 第13回 理論応用と理論形成
- 第14回 リサーチデザインの選択
- 第15回 実験デザイン対非実験デザイン
- 第16回 帰納的対演繹的
- 第17回 先行研究の意義
- 第18回 先行研究の批判的検討
- 第19回 データベース活用方
- 第20回 専門文献の検索

- 第21回 研究論文の組立
- 第21回 研究計画の検討
- 第22回 研究計画の点検
- 第23回 研究の展開・文献、調査研究
- 第24回 アウトラインとは何か
- 第25回 アウトラインは成長し変化する
- 第26回 アウトラインの作成
- 第27回 パラグラフについて
- 第28回 わかりやすい文章を書くために
- 第29回 仕上げ 引用の方法と確認
- 第30回 参考文献の取り上げ方

授業の予習・復習

必ず予習と復習を行ってください。毎回1200字程度のレポートを提出してもらいます。

使用教材

北川清一・佐藤豊道編 『ソーシャルワークの研究方法 実践の化学化と理論化を目指して』2010 相川書房
戸田山和久『新盤 論文の教室 レポートから卒論まで』2012NHKブックス

その他授業で適宜、指示します。

評価方法

演習での議論、レポートなどで評価していきます。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ・授業計画は変更する場合があります。
- ・オフィスアワーなどについては授業開始時などに支持します。
- ・Eメールアドレス:yokada@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

今年度より担当

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|----------------|-------|-------|----|
| 特別研究(演習)修士論文指導 | 小窪 輝吉 | 1～2年次 | 8 |

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

実証的な社会福祉研究について学び、修士論文作成の計画を立てる。

概要

社会心理学の領域の研究論文を題材にして実証的な研究スタイルを学ぶ。具体的には、社会福祉学と心理学の境界領域のテーマである生きがい感、幸福感、孤独感、社会的居場所感など個人の態度や行動と精神的健康の関連性に関する研究、あるいはリーダーシップ、チームワーク、職場ストレスなど集団・組織行動に関する研究の進め方と論文へのまとめ方を学ぶ。

研究テーマが固まり次第、先行研究の検討を行い、研究計画作成を行う。

授業では質疑応答の時間を多く取り入れる。

キーワード

社会心理学、社会福祉調査、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

実証的な社会福祉研究に関する論文を理解できる。修士論文作成の計画を立てることができる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション・講義計画
- 第2回 図書検索の練習
- 第3回 図書検索
- 第4回 論文検索の練習
- 第5回 論文検索
- 第6回 論文の読み合わせ
- 第7回 論文のレジюме作成
- 第8回 論文の発表
- 第9回 社会心理学の研究論文の検索
- 第10回 社会心理学の研究論文のレジюме作成
- 第11回 社会心理学の研究論文の発表
- 第12回 研究テーマの検討
- 第13回 研究方法の検討
- 第14回 研究計画の検討
- 第15回 研究テーマの発表
- 第16回 研究テーマに関する論文の読み合わせ1
- 第17回 研究テーマに関する論文のレジюме作成1
- 第18回 研究テーマに関する論文の発表1
- 第19回 研究テーマに関する論文の読み合わせ2

- 第20回 研究テーマに関する論文のレジュメ作成
- 第21回 研究テーマに関する論文の発表
- 第22回 研究計画書の検討
- 第23回 研究計画書の下書き
- 第24回 研究計画書の作成
- 第25回 調査項目の検討
- 第26回 調査項目の下書き
- 第27回 調査項目の作成
- 第28回 調査依頼書の作成
- 第29回 教育研究倫理委員会提出書類の作成
- 第30回 研究計画の発表

授業の予習・復習

授業課題をしておくこと。習ったことを自分の論文作成に関連づけて復習すること。

使用教材

テキストは使用しない。適宜関連資料を配布する。

評価方法

修士論文作成のための研究計画書により評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

論文作成に充てる時間を自分で確保するようにしてください。

用件があればまずはメールで連絡して下さい。アドレスは「tkokubo@soc.iuk.ac.jp」です。

前年度の授業評価

修士論文の方法に合わせて指導内容を微調整した。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|----------------|-------|-------|----|
| 特別研究(演習)修士論文指導 | 佐野 正彦 | 1～2年次 | 8 |

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業。

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

社会病理学や犯罪社会学の基本的な視角を理解する。

概要

本演習では、「社会病理学特講」で学んだ内容をさらに理論的に深化させることを目指す。現代日本社会には〈社会病理〉や〈社会問題〉と呼ぶにふさわしいさまざまな事件や出来事が発生している。本演習の主眼は、「社会病理学特講」で学んだレイベリング論などの諸理論の理解をさらに深め、こうした諸理論がさまざまな〈社会病理〉や〈社会問題〉にいかに関与・適用しうるのかを批判的に検討することにある。本演習に参加する各人は具体的な個別テーマを自ら設定し、担当教員はそれについて修士論文を作成できるよう個人指導を行う。

キーワード

社会病理、逸脱、同調、レッテル貼り、スティグマ、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

社会病理学や犯罪社会学の視角を用いて、如何に研究対象に切り込んでいくかを考え、実践できるようにする。

授業計画

ここでは社会学の基本を学ぶとともに「社会病理論特講」で用いたテキストをしっかりと理解するように努める。

- 第01回 オリエンテーション
- 第02回 社会学の基本概念 〈人間〉とはどのような生き物か？
- 第03回 社会学の基本概念 意味に生きる〈人間〉
- 第04回 社会学の基本概念 〈人間〉はどのように世界を捉えているのか？
- 第05回 社会学の基本概念 〈人間〉に〈本能〉はあるのか？
- 第06回 社会学の基本概念 絶対的価値観と相対的価値観
- 第07回 社会学の基本概念 アイデンティティの確立と〈文化〉
- 第08回 社会学の基本概念 何歳から〈青年期〉になるのか？
- 第09回 社会学の基本概念 社会学の時間概念:〈近代〉と〈前近代〉
- 第10回 社会学の基本概念 社会学の時間概念:〈近代〉と〈現代〉
- 第11回 社会学の基本概念 大衆社会論
- 第12回 社会学の基本概念 フーコーの〈権力論〉
- 第13回 社会学の基本概念 構造・機能・システム①
- 第14回 社会学の基本概念 構造・機能・システム②
- 第15回 前期のまとめ－何を学んだのか－
- 第16回 オリエンテーション－後期に何をするか－

- 第17回 社会病理学の基本概念 生来性犯罪人とイタリア犯罪人類学
- 第18回 社会病理学の基本概念 社会解体論①
- 第19回 社会病理学の基本概念 社会解体論②
- 第20回 社会病理学の基本概念 デュルケム犯罪学とアノミー論
- 第21回 社会病理学の基本概念 マートンの犯罪論
- 第22回 社会病理学の基本概念 自己観念と犯罪
- 第23回 社会病理学の基本概念 非行中和化の技術
- 第24回 社会病理学の基本概念 サザランドの分化的接触理論
- 第25回 社会病理学の基本概念 マルクス主義と犯罪論
- 第26回 アメリカン・ドリームと犯罪
- 第27回 シカゴという町ー産業とマフィアー
- 第28回 割れ窓理論
- 第29回 犯罪環境論と犯罪機会論
- 第30回 〈近現代人〉の正常と異常

授業の予習・復習

授業前には該当部分の予習に2時間以上かけて行うこと。

授業後には、よく理解できなかったことを明確にしたうえで、そのことについて自己学習につとめること。

使用教材

社会病理学の理解度を高めるため、社会病理学特講で用いた教材を再読する。

修士論文執筆にかかわる基本書・参考文献などについては、研究・執筆の進捗状況にしたがって適宜指示する。

評価方法

修士論文作成に至る過程のなかで「口頭報告50%、レポート提出50%」で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワー等につきましては初回の授業時にお知らせいたしますが、質問・相談は随時受け付けていますので、希望者はメール連絡をしてください。msano@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

履修者の体調不良により計画的な進行ができなかった。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|--------------------|-------|-------|----|
| 特別研究(演習)修士論文指導(M2) | 佐野 正彦 | 1～2年次 | 8 |

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業。

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

社会病理学や犯罪社会学の基本的視角を理解する。

概要

本演習では、「社会病理学特講」で学んだ内容をさらに理論的に深化させることを目指す。現代日本社会には〈社会病理〉や〈社会問題〉と呼ぶにふさわしいさまざまな事件や出来事が発生している。本演習の主眼は、「社会病理学特講」で学んだレイベリング論などの諸理論の理解をさらに深め、こうした諸理論がさまざまな〈社会病理〉や〈社会問題〉にいかに関与・適用しうるのかを批判的に検討することにある。本演習に参加する各人は具体的な個別テーマを自ら設定し、担当教員はそれについて修士論文を作成できるよう個人指導を行う。

キーワード

社会病理、逸脱、同調、スティグマ、レッテル貼り、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

社会病理学や犯罪社会学の視角を用いて、如何に研究対象に切り込んでいくかを考え、実践できるようにする。

授業計画

ここでは社会学の基本を学ぶとともに「社会病理論特講」で用いたテキストをしっかりと理解するように努める。

- 第01回 オリエンテーション
- 第02回 社会学の基本概念 〈人間〉とはどのような生き物か？
- 第03回 社会学の基本概念 意味に生きる〈人間〉
- 第04回 社会学の基本概念 〈人間〉はどのように世界を捉えているのか？
- 第05回 社会学の基本概念 〈人間〉に〈本能〉はあるのか？
- 第06回 社会学の基本概念 絶対的価値観と相対的価値観
- 第07回 社会学の基本概念 アイデンティティの確立と〈文化〉
- 第08回 社会学の基本概念 何歳から〈青年期〉になるのか？
- 第09回 社会学の基本概念 社会学の時間概念:〈近代〉と〈前近代〉
- 第10回 社会学の基本概念 社会学の時間概念:〈近代〉と〈現代〉
- 第11回 社会学の基本概念 大衆社会論
- 第12回 社会学の基本概念 フーコーの〈権力論〉
- 第13回 社会学の基本概念 構造・機能・システム①
- 第14回 社会学の基本概念 構造・機能・システム②
- 第15回 前期のまとめ－何を学んだのか－
- 第16回 オリエンテーション－後期に何をするか－

- 第17回 社会病理学の基本概念 生来性犯罪人とイタリア犯罪人類学
- 第18回 社会病理学の基本概念 社会解体論①
- 第19回 社会病理学の基本概念 社会解体論②
- 第20回 社会病理学の基本概念 デュルケム犯罪学とアノミー論
- 第21回 社会病理学の基本概念 マーソンの犯罪論
- 第22回 社会病理学の基本概念 自己観念と犯罪
- 第23回 社会病理学の基本概念 非行中和化の技術
- 第24回 社会病理学の基本概念 サザランドの分化的接触理論
- 第25回 社会病理学の基本概念 マルクス主義と犯罪論
- 第26回 アメリカン・ドリームと犯罪
- 第27回 シカゴという町ー産業とマフィアー
- 第28回 割れ窓理論
- 第29回 犯罪環境論と犯罪機会論
- 第30回 〈近現代人〉の正常と異常

授業の予習・復習

授業前には、該当箇所について2時間以上の予習をすること。

授業後には、学んだことを整理したうえで、理解できなかったことについて自己学習を行うこと。

使用教材

社会病理学の理解度を高めるため、社会病理学特講で用いた教材を再読する。

修士論文執筆にかかわる基本書・参考文献などについては、研究・執筆の進捗状況にしたがって適宜指示する。

評価方法

「口頭発表50%、レポート50%」で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワー等につきましては初回の授業時にお知らせいたしますが、質問・相談は随時受け付けていますので、希望者はメール連絡をしてください。msano@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

履修者は本年に修士論文を書き上げるつもりであったし、指導教員(私)も当初よりそのつもりで臨んだが、履修者の持病がひどく悪化したためかなわなかった。今年(平成30年)度こそはどうにかして修士論文完成に漕ぎつきたいと考えている。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|----------------|-------|-------|----|
| 特別研究(演習)修士論文指導 | 高橋 信行 | 1～2年次 | 8 |

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

研究方法としての質的研究法、量的研究方法、およびアクションリサーチを理解したうえで修士論文を作成する。

概要

修士論文作成の予備的作業として、研究方法の解説を中心に行う。これらを通して、地域福祉実践の現状と理論的枠組みについて考えるとともに、研究論文作成の過程についても検討していく予定である。事例研究や調査手法などが弱い場合は、順次それらについての情報提供やスキルアップのためのメニューを用意する予定である。課題については、コメント等を通してフィードバックを行う。

キーワード

アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

研究方法としての質的研究法、及び量的研究方法を理解し、研究に活かすことができる。

授業計画

- 1 オリエンテーション／研究するということー研究とは、研究の目的
- 2 研究の手順と研究計画
- 3 データ収集の方法
- 4 質的研究法を学ぶ
- 5 量的研究方法を学ぶ
- 6 アクションリサーチ(以下AR)を学ぶー専門的活動と公的活動における研究
- 7 ARの理論と原則
- 8 AR舞台を設定する:研究プロセスを計画する
- 9 AR見る:見取り図を作る
- 10 AR考える:解釈し、分析する
- 11 AR行動する:問題を解決するー計画し、持続可能な解決方法を講じる
- 12 持続可能な変化と発展をめざす戦略的計画
- 13 AR形式の整った報告書
- 14 ARを理解する
- 15 ARのまとめ
- 16 修士論文指導1(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 17 修士論文指導2(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 18 修士論文指導3(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 19 修士論文指導4(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 20 修士論文指導5(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 21 修士論文指導6(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)

- 22 修士論文指導7(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 23 修士論文指導8(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 24 修士論文指導9(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 25 修士論文指導10(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 26 修士論文指導11(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 27 修士論文指導12(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 28 修士論文指導13(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 29 修士論文指導14(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 30 修士論文指導15(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)

授業の予習・復習

授業時に課題として提示する。事前に資料を配布して、予習を行う。事前事後学習を含め4時間程度を必要とする。

使用教材

ストリンガー『アクション・リサーチ』目黒輝美・磯部卓三(監訳)発行フィリア 発売星雲社
萱間真美『質的研究実践ノート 研究プロセスを勧めるclueとポイント』医学書院2007
木下康仁『ライブ講義M-GTA -実践的質的研究法』弘文堂 2007
小田利勝『ウルトラ・ビギナーのためのSPSS統計解析入門』2007

※参考書については、演習の中で示します。

評価方法

受講姿勢やレポートの内容により評価を行う。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業計画は質的研究法を中心にしているが、量的研究法についても演習を行いたいと考える。

前年度の授業評価

授業評価アンケートは実施していないが、おおむねシラバスに沿った満足のいく授業が展開できたと思う。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|--------------------|-------|-------|----|
| 特別研究(演習)修士論文指導(M2) | 高橋 信行 | 1～2年次 | 8 |

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

研究方法としての質的研究法、量的研究方法、およびアクションリサーチを理解したうえで修士論文を作成する。

概要

修士論文作成の予備的作業として、研究方法の解説を中心に行う。これらを通して、地域福祉実践の現状と理論的枠組みについて考えるとともに、研究論文作成の過程についても検討していく予定である。事例研究や調査手法などが弱い場合は、順次それらについての情報提供やスキルアップのためのメニューを用意する予定である。

キーワード

アクティブ・ラーニング、アクションリサーチ、コミュニティワーク

授業の到達目標

研究方法としての質的研究法、及び量的研究方法を理解し、研究に活かすことができる。

授業計画

- 1 オリエンテーション／研究するということー研究とは、研究の目的
- 2 研究の手順と研究計画
- 3 データ収集の方法
- 4 質的研究法を学ぶ
- 5 量的研究方法を学ぶ
- 6 アクションリサーチ(以下AR)を学ぶー専門的活動と公的活動における研究
- 7 ARの理論と原則
- 8 AR舞台を設定する:研究プロセスを計画する
- 9 AR見る:見取り図を作る
- 10 AR考える:解釈し、分析する
- 11 AR行動する:問題を解決するー計画し、持続可能な解決方法を講じる
- 12 持続可能な変化と発展をめざす戦略的計画
- 13 AR形式の整った報告書
- 14 ARを理解する
- 15 ARのまとめ
- 16 修士論文指導1(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 17 修士論文指導2(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 18 修士論文指導3(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 19 修士論文指導4(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 20 修士論文指導5(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 21 修士論文指導6(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)

- 22 修士論文指導7(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 23 修士論文指導8(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 24 修士論文指導9(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 25 修士論文指導10(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 26 修士論文指導11(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 27 修士論文指導12(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 28 修士論文指導13(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 29 修士論文指導14(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
- 30 修士論文指導15(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)

授業の予習・復習

授業時に課題として提示する。前の週に資料を提供し、事前学習を行う。事前学習・事後学習を含め4時間程度を確保する。

使用教材

ストリンガー『アクション・リサーチ』目黒輝美・磯部卓三(監訳)発行フィリア 発売星雲社
萱間真美『質的研究実践ノート 研究プロセスを勧めるclueとポイント』医学書院2007
木下康仁『ライブ講義M-GTA -実践的質的研究法』弘文堂 2007
小田利勝『ウルトラ・ビギナーのためのSPSS統計解析入門』2007

※参考書については、演習の中で示します。

評価方法

受講姿勢(20%)やレポートの内容(80%)により評価を行う。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業計画は質的研究法を中心にしているが、量的研究法についても演習を行いたいと考える。
オフィースアワーは授業終了後に設定する。連絡が必要な場合は以下のアドレスに連絡をすること。
nobu@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

おおむねシラバスに即した授業ができた。学生のニーズをくみ取りながら、要望に沿うことができた。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|----------------|-------|-------|----|
| 特別研究(演習)修士論文指導 | 田中 安平 | 1～2年次 | 8 |

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う講義

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

実践の学問である社会福祉・介護における課題を自ら設定し、設定した課題解決の方策を論文として仕上げる手順等について学ぶ。出来上がった論文は福祉現場に還元できることを目標とする。絵に描いた餅は無意味である。

概要

2年間という修士課程期間は長いようで短いものである。本講座は、まず初めに修論テーマ(現場における課題等)を決める事から始める。書き上げる修論が福祉(実践)現場にフィードバックできる内容となることで、勤務しながら学び続ける意欲につながり、修論の完成までへとつながるのである。

テーマ(目標)が決まると、テーマに関する先行研究をレビューする。様々な先行研究をレビューするなかで、修論の骨格である章立て・節を決めていく(可能なら8月頃、遅くとも10月をめどに)。

アンケート(量的)調査を予定している場合には、遅くとも年度末(翌年の1～3月)までには調査を実行できるようになっていなければならない。(調査開始1～2か月前には本大学の教育研究倫理委員会の審査を受けることが大切である。)

この間、書き上げた原稿に対してその都度フィードバックをしていき、論文の書き方、体裁等について学ぶ。

キーワード

先行研究 フィードバック 臨床福祉 質的・量的調査 アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

実践の学問である社会福祉・介護における課題を自ら設定し、設定した課題解決の方策を理解するとともに身につける。

修論を作成する中で、論文の書き方、レビューの仕方、先行研究の方法等を身につけ、実践できるようになる。

アンケート(量的・質的)調査を実践し、分析できるようになる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 事前に決定していた修論テーマの妥当性についての検討
- 第3回 事前のテーマに類する先行文献検討
- 第4回 先行文献検討・テーマの決定
- 第5回 先行文献検討・章立て、節の検討
- 第6回 先行文献検討
- 第7回 質的・量的調査について指導・研究計画の検討
- 第8回 研究計画の仮決定
- 第9回 先行文献検討
- 第10回 先行文献検討

- 第11回 修士論文作成指導(執筆要領)①
- 第12回 修士論文作成指導(注や引用文献の書き方)②
- 第13回 修士論文作成指導(アンケート用紙作成)③
- 第14回 先行文献検討・臨床への影響
- 第15回 先行文献検討・臨床への影響

- 第16回 修士論文作成指導(臨床への妥当性)・論文部分的作成
- 第17回 修士論文作成指導(臨床への妥当性)・論文部分的作成
- 第18回 修士論文作成指導(臨床改善)・論文部分的作成
- 第19回 修士論文作成指導(臨床改善)・論文部分的作成
- 第20回 研究方法の見直し・修正
- 第21回 研究方法の決定
- 第22回 文献・調査等研究経過報告
- 第23回 文献・調査等研究経過報告指導
- 第24回 文献・調査等研究経過報告
- 第25回 文献・調査等研究経過報告指導
- 第26回 研究方法の見直し・修正
- 第27回 研究方法の決定
- 第28回 研究計画の見直し・修正
- 第29回 研究計画の決定
- 第30回 修士論文作成開始

授業の予習・復習

現場における実践内容を「なぜ」「どうしたら」という思考で常に分析することが実践学では大切である。「なぜ」「どうしたら」という状況を常に文章化し、最善の解決方法はどうかを明確化してくる。この繰り返しの中から模範解答のない正解を見つけることが可能になり、論文としてまとめることが出来るのである。

使用教材

特定のテキストは使用しない。適宜指示する。

評価方法

授業時の取り組み40%、事例検討や文献研究のあり方30%、目標の達成状況30%等により評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業に対する熱意等の評価は、減算により評価する(最大30%)。

疑問等、相談に関してはいつでも研究室に来られたし。時間的制約がある場合は、以下のメールでの対応も可能である。

yasuhira@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

前年度の授業評価は実施していないが、院生の現場実践にフィードバックでき、修論作成に結びつくゼミとしたい。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|--------------------|-------|-------|----|
| 特別研究(演習)修士論文指導(M2) | 田中 安平 | 1～2年次 | 8 |

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

福祉は実践学であることを踏まえ、自ら設定した課題を解決する独自の方策(オリジナリティ)を論文としてまとめる。福祉現場へ還元できる、現場変更を可能にする論文として完成する。

概要

できるだけ前期中には草稿をまとめ、提出できるようにする。後期(10月頃)に第2回の草稿を提出、第3回(12月下旬から1月初旬頃)で仕上げとなるような進捗を目指す。福祉は実践学であるので、論文を書き進める中で、実際に現場に論文内容を反映させながら、適宜修正していく。

修士が最終コースではなく、博士後期課程までめざすために求められる論文作成の方法論を身につける。確定したテーマに即して文章を書き進め、進捗状況にあわせて適宜見直しを図り、完成へと進めていく。

可能であれば、学会で発表できる原稿も同時並行で進めていく。

キーワード

福祉現場への還元 生活という臨床への対応 研究の楽しさ アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

実践の中から見えてきた課題に対して、解決するに相応しいテーマを設定することができる。対症的解決方法ではなく、抜本的解決につながる方法論として実践の中から解決策を目指す過程を論文としてまとめることができる。

自ら設定した課題を解決する独自の方策(オリジナリティ)を論文としてまとめ、福祉現場へ還元できるようになる。可能なら、博士後期課程へのテーマを視野に入れた論文作成とする。

授業計画

- 第1回 修士論文執筆開始
- 第2回 修士論文執筆開始・指導
- 第3回 研究の実施(文献、質的・量的調査票作成)
- 第4回 研究の実施(文献、質的・量的調査票修正指導)
- 第5回 研究の実施(文献、質的・量的調査実施)
- 第6回 研究の実施(文献、質的・量的調査実施)
- 第7回 研究の実施結果の集計
- 第8回 研究の実施結果の集計・分析・解釈
- 第9回 研究の実施結果の分析・解釈
- 第10回 研究の実施結果の分析・解釈・指導
- 第11回 中間発表の準備
- 第12回 中間発表の準備・作成
- 第13回 論文構成の検討・指導(序論)

- 第14回 論文構成の検討・指導(本文)
- 第15回 論文構成の検討・指導(結論)
- 第16回 修士論文執筆・第1回草稿提出
修士論文の修正・指導(序論)
- 第17回 修士論文草稿の修正(本文)
- 第18回 修士論文草稿の修正・指導(本文)・学会発表原稿作成
- 第19回 修士論文草稿の修正・指導(本文)・学会発表原稿作成
- 第20回 修士論文草稿の修正・指導(結論)
- 第21回 修士論文執筆(第2回草稿提出)
- 第22回 学会発表
- 第23回 学会発表原稿論文作成
- 第24回 学会発表原稿論文修正
- 第25回 修士論文の校正(序論)
- 第26回 修士論文の校正(本文)
- 第27回 修士論文の校正(結論)
- 第28回 修士論文完成
- 第29回 口頭試問対策準備①
- 第30回 口頭試問対策準備②

授業の予習・復習

日常の業務内容の見直し等、業務改善を考慮することがプロとしての職員の有り様である。抽象的議題でなく、論文としてまとめつつある内容を現場にどのように反映できるか、実践的内容となるような意識づけに基づく報告ができるよう、客観的に現場を分析してくること。

使用教材

特定のテキストは使用しない。適宜指示する。

評価方法

報告内容・研究への取り組み(40%)と、目標の達成状況等(60%)により総合的に評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業に対する熱意等の評価は、減産により評価する(最大30%)。

臨床での悩み・相談等、いつでも研究室に来られたし。

時間的制約がある場合、以下のメールでの対応も可能。

yasuhira@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

前年度の授業評価は実施していないが、院生の実践現場にフィードバックでき、かつ、修論完成に繋げるゼミとしたい。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|----------------|--------|-------|----|
| 特別研究(演習)修士論文指導 | 千々岩 弘一 | 1～2年次 | 8 |

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

教育分野に軸足を置いた修士論文の作成

概要

受講生の研究テーマに即して、教育に関する専門的な追究をしていく。

キーワード

アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

到達目標:

自己の関心・問題意識に基づいて設定した研究テーマに即して、先行研究を踏まえつつ、新しい時代に資する提言を修士論文としてまとめることができる。

授業計画

第1回オリエンテーション(演習の目的・目標、内容、方法、評価などに関する説明)

第2回修士論文研究テーマの設定1

第3回修士論文研究テーマの設定2

第4回修士論文研究方法の確認

第5回修士論文構成の立案1

第6回修士論文構成の立案2

第7回修士論文参考文献リストの作成に関する助言

第8回修士論文草稿の作成1(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第9回修士論文草稿の作成2(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第10回修士論文草稿の作成3(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第11回修士論文草稿の作成4(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第12回修士論文草稿の作成5(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第13回修士論文研究方法の再確認

第14回修士論文草稿の作成6(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第15回修士論文草稿の作成7(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第16回修士論文草稿の作成8(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第17回修士論文草稿の作成9(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第18回修士論文草稿の作成10(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第19回修士論文草稿の作成11(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第20回修士論文草稿の作成12(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第21回修士論文草稿の作成13(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第22回修士論文草稿の作成14(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第23回修士論文草稿の完成1(完成した修士論文の報告とそれに対する助言)

第24回修士論文の完成2(修正した修士論文の報告とそれに対する助言)

第25回修士論文の校正1

第26回修士論文の校正2

第27回修士論文の校正3

第28回修士論文の完成

第29回口頭試問準備①

第30回口頭試問準備②

以上のような内容で、学生一人一人の関心や問題意識に基づいて設定された研究テーマについて追究していく。

授業の予習・復習

助言に合わせて、必要に応じて文献による考察を深めること。

使用教材

必要に応じて、基本文献・参考文献に関する助言を行う。

評価方法

受講態度及び研究発表、修士論文の質で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

相談がある場合は、アポイントを取ったうえで遠慮なく相談してください。

前年度の授業評価

前年度は開講しておらず、授業評価は行っていない。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|----------------|-------|-------|----|
| 特別研究(演習)修士論文指導 | 中山 慎吾 | 1～2年次 | 8 |

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

高齢者保健福祉等に関する研究を主に扱うこととし、修士論文の作成に必要な知識・研究方法を学習する。

概要

- ・論文作成の方法についての学習を中心とする。
- ・パソコンの操作(エクセルの操作等)を身につける。
- ・レポート等に関してはその後の授業またはEメールにてフィードバックを行う。

キーワード

論文作成、高齢者保健福祉等、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

自分が関心をもつ高齢者保健福祉等に関する知識を理解している。論文の作成に必要な知識・研究方法を理解している。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション(大学院での学習)
- 第2回 オリエンテーション(論文を書くとは)
- 第3回 関心のあるテーマの議論(自由議論)
- 第4回 関心のあるテーマの議論(テーマを絞った議論)
- 第5回 文献検索(検索の基本)
- 第6回 文献検索(テーマに関する資料)
- 第7回 文献検索(収集資料に基づく検討)
- 第8回 文献の読解(読解の方法)
- 第9回 文献の読解(発表・討論)
- 第10回 文献の読解(前回の続き)
- 第11回 研究計画の検討(論文の構造)
- 第12回 研究計画の検討(研究方法)
- 第13回 研究計画の検討(具体的な研究手順)
- 第14回 エクセル等の操作(基本操作)
- 第15回 エクセル等の操作(関数等)
- 第16回 進捗状況の確認(これまでの振り返り)
- 第17回 進捗状況の確認(論文作成に関する確認等)
- 第18回 文献検索(必要な資料収集)
- 第19回 文献検索(文献一覧)
- 第20回 研究の展開(文献または調査研究)
- 第21回 研究の展開(研究計画の確認)

- 第22回 研究の展開(具体的な進行)
- 第23回 研究の展開(継続的な進行)
- 第24回 研究の展開(進行状況の確認等)
- 第25回 研究の展開(継続的な進行)
- 第26回 文章の書き方(基本の理解)
- 第27回 文章の書き方(執筆可能箇所確認)
- 第28回 文章の書き方(具体的な進行)
- 第29回 パソコン操作の確認(基本操作)
- 第30回 パソコン操作の確認(応用学習)

授業の予習・復習

授業の前後に必ず合計4時間程度の予習・復習を行うこと(授業前:次回のテーマに関する資料収集・読解等、授業後:授業での配布資料等の読解・考察等)。

使用教材

授業開始時などに指示する。

評価方法

演習での平常点60%、提出原稿等40%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ・授業計画等は変更する場合がある。・オフィスアワー等については授業開始時などに指示する。
- ・Eメールアドレス: nakayama@soc.iuk.ac.jp
- ・授業途中で課したレポートや課題に関しては、授業等においてフィードバックを行う。

前年度の授業評価

修士論文作成に向けて、文献の検索と検討、調査の企画実施等に取り組むことができました。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|--------------------|-------|-------|----|
| 特別研究(演習)修士論文指導(M2) | 中山 慎吾 | 1～2年次 | 8 |

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

高齢者保健福祉等に関する研究を主に扱うこととし、修士論文の作成に必要な知識・研究方法を学習する。

概要

- ・論文作成の方法についての学習を中心とする。
- ・パソコンの操作(エクセルの操作等)を身につける。
- ・レポート等に関してはその後の授業またはEメールにてフィードバックを行う。

キーワード

論文作成、高齢者保健福祉等、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

自分が関心をもつ高齢者保健福祉等に関する知識を理解している。論文の作成に必要な知識・研究方法を理解している。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション(大学院での学習)
- 第2回 オリエンテーション(論文を書くとは)
- 第3回 関心のあるテーマの議論(自由議論)
- 第4回 関心のあるテーマの議論(テーマを絞った議論)
- 第5回 文献検索(検索の基本)
- 第6回 文献検索(テーマに関する資料)
- 第7回 文献検索(収集資料に基づく検討)
- 第8回 文献の読解(読解の方法)
- 第9回 文献の読解(発表・討論)
- 第10回 文献の読解(前回の続き)
- 第11回 研究計画の検討(論文の構造)
- 第12回 研究計画の検討(研究方法)
- 第13回 研究計画の検討(具体的な研究手順)
- 第14回 エクセル等の操作(基本操作)
- 第15回 エクセル等の操作(関数等)
- 第16回 進捗状況の確認(これまでの振り返り)
- 第17回 進捗状況の確認(論文作成に関する確認等)
- 第18回 文献検索(必要な資料収集)
- 第19回 文献検索(文献一覧)
- 第20回 研究の展開(文献または調査研究)
- 第21回 研究の展開(研究計画の確認)

- 第22回 研究の展開(具体的な進行)
- 第23回 研究の展開(継続的な進行)
- 第24回 研究の展開(進行状況の確認等)
- 第25回 研究の展開(継続的な進行)
- 第26回 文章の書き方(基本の理解)
- 第27回 文章の書き方(執筆可能箇所確認)
- 第28回 文章の書き方(具体的な進行)
- 第29回 パソコン操作の確認(基本操作)
- 第30回 パソコン操作の確認(応用学習)

授業の予習・復習

授業の前後に必ず合計4時間程度の予習・復習を行うこと(授業前:次回のテーマに関する資料収集・読解等、授業後:授業での配布資料等の読解・考察等)。

使用教材

授業開始時などに指示する。

評価方法

演習での平常点60%、提出原稿等40%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ・授業計画等は変更する場合がある。・オフィスアワー等については授業開始時などに指示する。
- ・Eメールアドレス: nakayama@soc.iuk.ac.jp
- ・授業途中で課したレポートや課題に関しては、授業等においてフィードバックを行う。

前年度の授業評価

修士論文の作成に向けて、文献の読解や調査の実施・分析等に取り組むことができました。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|----------------|-------|-------|----|
| 特別研究(演習)修士論文指導 | 野田 隆峰 | 1～2年次 | 8 |

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

自分の研究テーマに関して文献等から歴史的に概観しその分野の研究の動向を把握する。その上で研究テーマを決めて研究法及び研究論文作成法の基本を修得する。

概要

精神保健福祉分野の臨床を題材に各自研究テーマを設定する。この段階で研究テーマ領域の文献を参考にその研究の動向を概観する。以後は自分の研究テーマに関して研究方法や論文作成方法などを随時指導しながら論文作成の指導をしていく。

キーワード

精神保健福祉分野に関する福祉臨床的研究、精神病理学

授業の到達目標

研究の手順、文献活用法、論文作成法などを理解し、研究法及び研究論文作成法の基本を修得する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション(当科目の概要説明)
- 第2回 研究テーマの設定作業(各自の関心領域の発表)
- 第3回 研究テーマの設定作業①(テーマの概要説明)
- 第4回 研究テーマの設定作業②(テーマの概要説明)
- 第5回 文献探索法①(関連論文の検索)
- 第6回 文献探索法②(関連論文の検索)
- 第7回 文献探索法③(関連論文の検索)
- 第8回 文献探索法①(関連専門書の検索)
- 第9回 文献探索法②(関連専門書の検索)
- 第10回 文献探索法③(関連専門書の検索)
- 第11回 検索論文及び専門書の確認作業(各自のテーマ)
- 第12回 論文読解①(各自の解説)
- 第13回 論文読解②(各自の解説)
- 第14回 専門書読解①(各自の解説)
- 第15回 専門書読解②(各自の解説)
- 第16回 専門書読解③(各自の解説)
- 第17回 討論①(文献による)
- 第18回 討論②(文献による)
- 第19回 討論③(文献による)
- 第20回 論文作成作業①(作成の基本)
- 第21回 論文作成作業②(構成スタイル)

- 第22回 論文作成作業③(はじめに)
- 第23回 論文作成作業④(研究目的)
- 第24回 論文作成作業⑤(研究方法)
- 第25回 論文作成作業⑥(結果及び考察)
- 第26回 論文作成作業⑦(結論及びまとめ)
- 第27回 論文作成作業⑧(抄録)
- 第28回 作成論文の報告・討論①(各自の発表)
- 第29回 作成論文の報告・討論②(各自の発表)
- 第30回 作成論文の最終仕上げ(各自の発表)

授業の予習・復習

約4時間程度の予習復習を行うこと。
その内容は研究関連文献等を熟読し理解すること。

使用教材

指導期間中に随時紹介する。

評価方法

修士論文の審査内容による。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

研究テーマに関連する福祉臨床分野の文献を歴史的に検索しておくこと。
また研究テーマに関連する精神医学分野(時に精神病理学分野)の文献等も検索しておくこと。
オフィスアワーは講義前後や研究室メール(メルアドは講義初回にプレゼン)を活用する。

前年度の授業評価

履修学生無し。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|----------------|-------|-------|----|
| 特別研究(演習)修士論文指導 | 松元 泰英 | 1～2年次 | 8 |

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

論文の書き方を学び、実際に修士論文を書く

概要

論文の書き方について理解し、実際に論文を書く。

キーワード

エビデンス 統計 RCT 文献データベース アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

自ら研究内容、方法等を考え、研究実践を行いその結果を考察し、発表できる

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 研究の目的
- 第3回 過去の研究(1:データベースの活用方法)
- 第4回 過去の研究(2:RCTについて)
- 第5回 統計学について(1:統計の必要性)
- 第6回 統計学について(2:統計の方法)
- 第7回 統計学について(3:統計の実際)
- 第8回 研究の目的
- 第9回 研究の内容
- 第10回 研究の実際(1:はじめに)
- 第11回 研究の実際(2:研究の目的)
- 第12回 研究の実際(3:研究の目的)
- 第13回 研究の実際(4:研究の方法)
- 第14回 研究の実際(5:研究の方法)
- 第15回 研究の実際(6:研究の結果)
- 第16回 研究の実際(7:研究の結果)
- 第17回 研究の実際(8:研究の結論)
- 第18回 研究の実際(9:研究の考察)
- 第19回 研究の実際(10:抄録)
- 第20回 研究の結果(1:結果に対する意見・討論)
- 第21回 研究の結果(2:意見に対する修正)
- 第22回 研究の考察(1:研究からの)
- 第23回 研究の考察(2:過去の研究との比較検討)

- 第24回 研究の課題(1:今後の研究)
- 第25回 研究の課題(2:研究の反省)
- 第26回 研究の報告準備(1:プレゼンソフトの利用法)
- 第27回 研究の報告準備(2:効果的なプレゼンソフトの活用法)
- 第28回 研究の報告準備(3:プレゼンの実際)
- 第29回 研究の報告・討論
- 第30回 研究の最終確認

授業の予習・復習

基本的には、自分自身で研究実践を進めていく。この論文指導の時間は、教員との論文の方向性や結果の確認の時間とする。そのため、毎授業前に、授業で話し合う内容の資料を完成しておくこと。基本的に、授業前後には4時間程度の予習復習を行うこと。

使用教材

統計資料 学生の持参する研究結果及び資料

評価方法

修士論文審査

履修上の留意事項・授業時間外の対応

論文の書き方や実践方法については必要に応じて随時研究室を訪問してもらう

前年度の授業評価

今年度より開講

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|----------------|-------|-------|----|
| 特別研究(演習)修士論文指導 | 蓑毛 良助 | 1～2年次 | 8 |

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

テーマ: 修士論文の質を高める。

概要

臨床発達心理学に関する論文(国内外)の輪読会を行う。まず、最初は、こちらから論文を指定して輪読会をし、次に受講生が選択した論文について輪読会を行う。論文の批評的な読み方、論文の要約、発表の仕方、引用文献、参考文献の活用の仕方を説明し、論文の書き方を説明する。そして、修士論文のテーマに接近できるよう援助する。論文作成過程で他の院生や第三者を加えて討論・修正論文を提出してフィードバックしながら進める。

キーワード

修士論文、テーマ設定、先行研究、展開、考察、引用文献、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

到達目標: 論文作成の為の資質を高め、方法の手順を知り、修士論文をまとめる(はじめに・目的・方法・結果・考察・文献)。

授業計画

(1年前期)

第1回オリエンテーション

第2回修士論文のテーマの検討(1)

第3回修士論文のテーマの検討(2)

第4回テーマ設定の理由の検討(1)

第5回テーマ設定の理由の検討(2)

第6回テーマに関連した日本語の論文の購読(2)

第7回 テーマに関連した英文の論文の購読(1)

第8回テーマに関連した英文の論文の購読(2)

第9回研究方法の検討(文献・調査・実験)ー(1)

第10回研究方法の検討(文献・調査・実験)ー(2)

第11回事前研究計画の方法の検討(1)

第12回事前研究計画の方法の検討(2)

第13回事前研究の実施(1)

第14回事前研究の実施(2)

第15回前期のまとめ

(1年後期)

第1回研究計画の検討(1)

第2回研究計画の検討(2)

第3回研究方法の開始(1)

第4回研究方法の開始(2)

第5回研究結果の検討(1)

第6回研究結果の検討(2)

第7回仮設の検討(1)

第8回仮設の検討(2)

第9回予備研究の開始(1)

第10回予備研究の開始(2)

第11回研究結果の検討(1)

第12回研究結果の検討(2)

第13回考察の検討(1)

第14回考察の検討(2)

第15回後期のまとめ

授業の予習・復習

修士論文のテーマを定める。先行論文を多数読む。研究方法を検討する。結果の分析。考察、仮設の確認。引用文献の整理などに毎回務める。

評価方法

毎回の受講姿勢やレポート発表の内容で評価する。積極的にテーマに関連する文献を探し、論文の要約を蓄積することやフィールド調査等を授業時間外にも取り組んだかも評価の対象とする。

前年度の授業評価

授業の評価では、院生とともに考え丁寧な指導を受けた事で修士論文を完成させることができた事など好評であった。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|--------------------|-------|-------|----|
| 特別研究(演習)修士論文指導(M2) | 蓑毛 良助 | 1～2年次 | 8 |

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

テーマ: 修士論文の質を高める。

概要

臨床発達心理学に関する論文(国内外)の輪読会を行う。まず、最初は、こちらから論文を指定して輪読会をし、次に受講生が選択した論文について輪読会を行う。論文の批評的な読み方、論文の要約、発表の仕方、引用文献、参考文献の活用の仕方を説明し、論文の書き方を説明する。そして、修士論文のテーマに接近できるよう援助する。論文作成の過程で他の院生や第三者を加えて討論した後修正論文の提出を繰り返しながらフィードバックして進める。

キーワード

修士論文、研究テーマの確認、先行研究の整理、結果の整理、仮設の確認・考察、引用文献・参考文献の整理、資料の整理、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

到達目標: 論文作成の為の資質を高め、方法の手順を知り、修士論文をまとめる(はじめに・目的・方法・結果・考察・文献)。

授業計画

(2年前期)

- 第1・2回 オリエンテーション
- 第3・4回 修士論文のテーマの検討
- 第5・6回 テーマ設定の理由
- 第7・8回 テーマに関連した論文の講読
- 第9・10回 テーマに関連した論文の講読
- 第11・12回 テーマに関連した論文の講読
- 第13・14回 研究方法の検討
- 第15回 研究方法の検討(文献・調査・実験)

(2年後期)

- 第1・2回 研究計画の検討
- 第3・4回 文献・調査・実験研究の開始
- 第5・6回 文献・調査・実験研究の経過報告
- 第7・8回 仮説の検討
- 第9・10回 予備研究(文献・調査・実験)
- 第11・12回 結果分析
- 第13～15回 考察の検討

授業の予習・復習

修士論文に関する先行論文を多数読むこと。研究方法を検討すること。結果を客観的に明示すること。仮設の確認と考察を検討すること。引用文献・参考文献を整理すること。資料を整理することなどに努める。

評価方法

毎回の受講姿勢やレポート発表の内容で評価する。積極的にテーマに関連する文献を探し、論文の要約を蓄積する事やフィールド調査等を授業時間外にも取り組んだかも評価の対象とする。

前年度の授業評価

修士論文の作成過程で、共に考え共に論文を検索し、参考人を呼んで討論したり丁寧な指導を受けたお蔭で修士論文を完成させる事が出来たという評価を受けた。

| 科目名 | 担当者名 | 開講学期 | 単位 |
|----------------|-------|-------|----|
| 特別研究(演習)修士論文指導 | 吉留 久晴 | 1～2年次 | 8 |

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

教育・学校問題の研究

概要

本演習で、受講生は教育学研究法の手ほどき・指導を受けながら、以下のような研究活動に取り組む。まず、修士論文作成につながるように、各自の問題意識に基づき研究テーマを設定する。ついで、そのテーマに関する先行研究の収集・分析を行い、先行研究で十分に解明されていない課題について明らかにする。さらに、上記の基礎作業を行いながら、問題意識・研究テーマを一層明確にしつつ、関連する論文や資料の収集・分析に取り組む。こうした研究活動をベースとして、受講生にはオリジナリティーの高い修士論文の作成を目指してもらおう。

キーワード

教育学研究、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

1. 教育・学校問題に関する諸問題等を多角的かつ客観的に把握することができる。
2. 教育・学校問題に関する事実や実態等を究明することができる。
3. 調査・分析した内容等を口頭および文章で論理的に説明することができる。

授業計画

※下記の内容は受講生の人数や研究テーマによって変更する可能性がある。

第1回 前期ガイダンス

第2回 研究テーマの設定

第4.5回 文献資料の収集・分析法の指導

第6-10回 先行研究の分析結果の発表

第11・12回 研究方法の指導

第13-15回 研究視角・方法の検討

第16回 後期ガイダンス

第17-25回 研究成果の発表

第26-29回 修士論文の研究計画・論文構成の検討

第30回 総括

授業の予習・復習

各授業後に合計で4時間程度の復習を行うこと。

使用教材

テキストは使用しない。参考文献等については、授業中に適宜紹介する。

評価方法

授業での発表やレポートの内容、研究活動の進捗状況・成果などにより評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業外での質問・相談等には、研究室で対応する。

前年度の授業評価

該当なし。